

米沢市埋蔵文化財報告書 第43集

K-539

塔原

発掘調査報告書

1994

米沢市教育委員会

塔原

発掘調査報告書

1994

米沢市教育委員会

序 文

本報告書は、米沢市小野川町地区内にある塔ノ原遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。本調査は、平成3年度、公共施設建設に伴う緊急発掘調査として実施しました。

このたびの調査において、本遺跡からは縄文前期、中期の集落跡を発見するとともに、多数の遺物も出土しました。

遺物の中でも特筆すべき点は、線刻原始絵画を有する石製品や琴状の石製品が、発見されたことです。これらは、考古資料として注目され、平成4年に米沢市の文化財に指定されました。

本遺跡は万世の八幡原遺跡群や南原の大檜遺跡、窪遺跡、花沢の花沢A遺跡に匹敵する重要な遺跡と考えております。

今回の調査は、鬼面川上流域では初の本格的な発掘調査であり、鬼面川上流流域での縄文文化の発達と成立を考える上で、重要な遺跡と言えます。

今後も、埋蔵文化財の保護保存に協力してまいり所存でありますので、関係各位のより一層のご協力をお願い申し上げます。

最後になりましたが、今回の調査において、格別のご指導、ご協力を賜りました山形県教育庁文化課、鈴木 亮氏、米沢市開発公社、三沢公民館に対して、心から感謝申し上げます。

平成6年3月31日

米沢市教育委員会

教諭 小口 亘

例　　言

1. 本報告書は、公共施設建設に伴う緊急発掘調査として、米沢市教育委員会が実施した塔ノ原遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 調査は米沢市教育委員会が主体となって、山形県教育庁文化課との協議のうえ実施したものであり、期間は平成3年（1991）4月18日～同年7月19日までの延べ59日間であった。
3. 調査体制は下記の通りである。

調査主体 米沢市教育委員会

調査総括 小関 薫（文化課長）

調査担当 手塚 孝（文化課文化財係主任）

調査主任 菊地政信（文化課文化財係主任）

調査補助員 原 三郎、鈴木由美子

作業員 小浦文吉、沢根英夫、加藤三郎、中島国雄、佐藤栄吉、遠藤昭一、丸田義雄、斉藤和雄、遠藤キヨ、遠藤好吉、大地 厚、嶋貫六助、黄木俊夫、皆川清助、遠藤忠一、加藤文教、遠藤裕子、武田房次郎

事務局長 木村琢美（文化課長補佐）

事務局 小林伸一（文化課文化財係長）

平間洋子（文化課文化財係主査）

調査指導 山形県教育庁文化課

調査協力 米沢開発公社、鈴木 亮、三沢公民館

4. 採図縮尺は、各々にスケールで示した。遺構平面の方位記号は真北に統一した。写真図版の復元土器は縮尺不同とした。

5. 本報告書で使用した遺構、遺物の分類記号及び、遺構等の図化は「米沢市埋蔵文化財報告書第15集」に沿っている。

6. 遺物の出土地点は採図に示した。「F」は包含層の覆土、「f」は遺構の覆土を表す。

7. 遺構等の土層については、『新版標準土色表』（小山、竹原1973）等を参考にした。

8. 本報告書の作成は菊地政信が担当した。全般的に手塚 孝が総括した。責任校正は我妻淳一がその責務にあたった。トレース、遺物整理等については、平野洋子、工藤智恵子、小浦文吉、黒田よし子、武田房次郎、鈴木由美子が補助した。

本文目次

(表紙題字は米沢市教育委員会教育長 小口 亘による)

序文

例言

目次

1. 遺跡の概要	1
2. 調査の経過	1
3. 検出遺構	3
・堅穴住居跡	3
・掘立柱建物跡	10
・土壤	10
4. 検出遺物	17
◎土器	17
・I群土器	17
・II群土器	22
・III群土器	22
◎石器	43
◎石製品	48
5.まとめ	49
参考文献	50

挿図目次

第1図 塔ノ原遺跡位置図、グリッド配図	2
第2図 塔ノ原遺跡H Y13平面図(1)	4
第3図 塔ノ原遺跡H Y156、517平面図(2)	5
第4図 塔ノ原遺跡H Y220、221平面図(3)	6
第5図 塔ノ原遺跡H Y228、229平面図(4)	7
第6図 塔ノ原遺跡H Y 3、4、5、83、230平面図(5)	9
第7図 塔ノ原遺跡E Y28、29、30平面図(6)	11
第8図 塔ノ原遺跡B Y231平面図(1)	13
第9図 塔ノ原遺跡B Y232平面図(2)	14
第10図 塔ノ原遺跡B Y233平面図(3)	15
第11図 塔ノ原遺跡土壤分類図(1)	16
第12図 塔ノ原遺跡土壤平面図(2)	18
第13図 塔ノ原遺跡土壤平面図(3)	19

第14図 塔ノ原遺跡土壤平面図(4).....	20
第15図 塔ノ原遺跡土壤平面図(5).....	21
第16図 塔ノ原遺跡出土土器拓影展開図(1).....	23
第17図 塔ノ原遺跡出土土器実測図(2).....	24
第18図 塔ノ原遺跡出土土器実測図(3).....	25
第19図 塔ノ原遺跡出土土器実測図(4).....	26
第20図 塔ノ原遺跡出土土器実測図(5).....	27
第21図 塔ノ原遺跡出土土器実測図(6).....	28
第22図 塔ノ原遺跡出土土器展開図(7).....	29
第23図 塔ノ原遺跡出土土器実測図(8).....	30
第24図 塔ノ原遺跡出土土器拓影図(1).....	31
第25図 塔ノ原遺跡出土土器拓影図(2).....	32
第26図 塔ノ原遺跡出土土器拓影図(3).....	33
第27図 塔ノ原遺跡出土土器拓影図(4).....	34
第28図 塔ノ原遺跡出土土器拓影図(5).....	35
第29図 塔ノ原遺跡出土石器実測図(1).....	37
第30図 塔ノ原遺跡出土石器実測図(2).....	38
第31図 塔ノ原遺跡出土石器実測図(3).....	39
第32図 塔ノ原遺跡出土石器実測図(4).....	40
第33図 塔ノ原遺跡出土石器実測図(5).....	41
第34図 塔ノ原遺跡出土石器実測図(6).....	42
第35図 塔ノ原遺跡出土石製品実測図(7).....	44
第36図 塔ノ原遺跡出土石製品実測図(8).....	45
第37図 塔ノ原遺跡出土石製品実測図(9).....	46
第38図 塔ノ原遺跡出土石製品実測図(10).....	47

図 版 目 次

卷頭図版一 塔ノ原遺跡調査区全影 住居跡全影HY3.4.5

卷頭図版二 有孔彩色土器 石製品

第一図版 塔ノ原遺跡の発掘 (1)

第二図版 塔ノ原遺跡の発掘 (2)

第三図版 塔ノ原遺跡の発掘 (3)

第四図版 塔ノ原遺跡出土の土器 (1)

第五図版 塔ノ原遺跡出土の土器 (2)

第六図版 塔ノ原遺跡出土の土器 (3)

第七図版 塔ノ原遺跡出土の土器	(4)
第八図版 塔ノ原遺跡出土の土器	(5)
第九図版 塔ノ原遺跡出土の土器	(6)
第十図版 塔ノ原遺跡出土の土器	(7)
第十一図版 塔ノ原遺跡出土の土器	(8)
第十二図版 塔ノ原遺跡出土の土器	(9)
第十三図版 塔ノ原遺跡出土の土器	(10)
第十四図版 塔ノ原遺跡出土の土器	(11)
第十五図版 塔ノ原遺跡出土の土器	(12)
第十六図版 塔ノ原遺跡出土の土器	(13)
第十七図版 塔ノ原遺跡出土の石器	(1)
第十八図版 塔ノ原遺跡出土の石器	(2)
第十九図版 塔ノ原遺跡出土の石製品	(1)

付 図

1. 塔ノ原遺跡造構全体図
2. 塔ノ原遺跡出土状況



▲ 調査区全景（空中から）



▲ 住居跡全景 手前からHY 5.4.3 (南方から)



▲ 有孔彩色土器 (21-1)



▲ 石製品

1. 遺跡の概要

本遺跡は米沢市小野川町字塔ノ原に所在する。標高322mから320mの舌状丘陵の先端部に位置しており、東方を大樽川、西方を綱木川に挟まれている。

遺跡の分布する台地は、大樽川によって形成された河岸段丘の影響で西側から東側・北側から南側方向にゆるやかに傾斜している。現在は水田や畑地となっているが、以前は桑畠で覆われていた。

遺跡の発見は、米沢市教育委員会が昭和56年から昭和60年にかけて実施した分布調査によって発見されたもので、遺跡範囲は約12,000m²と推測している。地元では石器や土器片を採集しており、以前から遺跡の存在は知られていたようである。

塔ノ原遺跡が位置する場所は、前述したように各河川が合流する付近であり、東方から大樽川・綱木川、さらに大田川の三河川が北流している。これらの河川によって形成された河川段丘上には、数多くの遺跡が確認されている。表採や農作業等の際に偶然発見した遺物も数多く認められ、それらの中には縄文晩期の石剣も含まれていた。しかし、本遺跡周辺での発掘調査は今回が初めてであり、本遺跡周辺における鬼面川上流流域での縄文遺跡の成立を考える上で注目される。

2. 調査の経過

今回の調査面積は2,200m²である。1990年(平成2年)の晚秋に試掘調査を実施し、調査区を設定した。調査は、雪解けを持って4月18日から開始し、調査区全域に8m×8mのグリッドを基準に真北方向に設定した。(第1図参照)

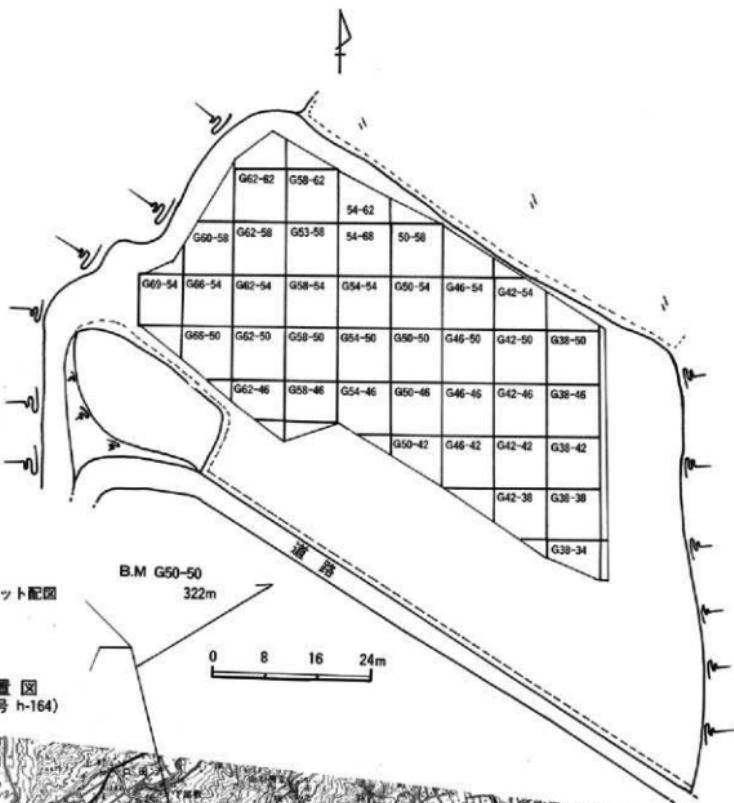
表土剥離は重機を用いて慎重に進め、面整理、精査の順で行なった。その結果、調査区の北西部からは、縄文中期の竪穴住居跡、中央部からは土壙群、礫群を発見した。礫群は調査が進むにつれ、自然堆積と判り、撤去しながら遺構の確認を行なう。礫群の出土状況は付図2を参照願いたい。

礫群の上面には、土壙群、掘立柱建物跡、さらに北東には縄文前期の竪穴住居跡が確認された。遺跡が複合しており、遺構の新旧関係を把握しながら、遺構の掘り下げに5月中旬から着手した。掘り下げに際し、風倒木塙と明確に判断できるのは、掘り下げを割愛する。

遺構は黒土層を掘り込んでいるものと、地山を掘り込んでいるものがあり、黒土層を掘り込んでいる遺構については、掘り下げ後、平面図を作成し次に下層の遺構掘り下げを実施した。7月9日までに遺構の掘り下げを終了し、写真撮影、セクション図作成等を7月14日までに終了するに至った。

7月15日には調査は全体を空中から撮影するため、ラジコンヘリコプターを飛ばした。天気が良く一日で終了した。次の日の7月16日には、午前10時より、現地説明会をおこなった。あいにくこの日は雨天であったが、約50人の来訪者があった。

縄文中期の竪穴住居跡から検出した炉跡の礫は、現地説明会後に番号をつけ、平板に記入しながら取り上げた。平面図作成は7月19日までに完了し、同日に発掘用具を次の発掘調査地に運搬した。今回の調査区は、若干削平された箇所もあったが、ほぼ現況を示しており、開田の際に重機を導入しなかったのが幸し、遺構、遺物を残存させていたものと想定される。



位置図
(道路番号 h-164)



第1図 塔ノ原遺跡位置図・グリッド配図

3. 検出遺構

今回の調査区からは総計165基の遺構群が発見された。最も多いのが、土壙群で109基、次いでピット群が41基、竪穴住居跡12棟、掘立建物跡3棟であった。これらの遺構はⅠ群土器併行、Ⅱ群土器併行、Ⅲ群土器併行のⅢ時期に分けられる。

Ⅰ群土器は縄文前期初頭、Ⅱ群土器は縄文前期未葉、Ⅲ群土器は縄文中期未葉と位置付けられる。下記にこれらの土器群に併行する遺構群を述べる。

○竪穴住居跡〔第2図〕

H Y13は縄文前期初頭の竪穴住居跡である。平面形状が方形状を呈すものと考えられ、現長で南北(3.6m)、東西3.5mを測る。地床炉が確認されており、Ⅰ群a類土器が出土している。

縄文中期の土壙によって、壁面が切られている。柱穴は壁柱穴で7本確認された。北方に延びるものと考えられる。

竪穴住居跡〔第3図～5図〕

縄文前期未葉に位置付けられる住居跡群であり、6棟確認された。平面形状は梢円形を呈し、壁柱穴を基本とした竪穴住居跡である。調査区の北東部に集中して発見され、北方に延びる様相を有する。確認面からは、打製石斧や、石槍等が出土しており、特に石斧は尖状を呈する第32図3の形態が主体をなす。住居跡覆土からの遺物出土数は少ない。これらの住居跡に伴なう土壙として、D Y218、217、216、222、211、119、212、213の8基がある。いづれも東方に集中しており、覆土からは、ほとんど遺物は出土しなかった。

H Y156、157〔第3図〕

前期未葉の竪穴住居跡としては、最も南に位置する。東側をD Y126によって切られる。炉は確認されなかった。柱穴は60～70cm間隔を置いて8本配置されている。壁はゆるやかに立上がる。

覆土からは石砲状石器2点、石匙1点、スクレーパー1点、尖頭器1点が出土がある。平面形状は隅丸方形に近い梢円形を呈する。長径4.0m、短径3.4mを測る。

H Y157はH Y156の北東約8mの地点に位置し、半分を完掘したものと想定される。柱穴は壁直下にて7本確認した。長径(4.6m)、短径4.6mを測り、炉は認められなかった。

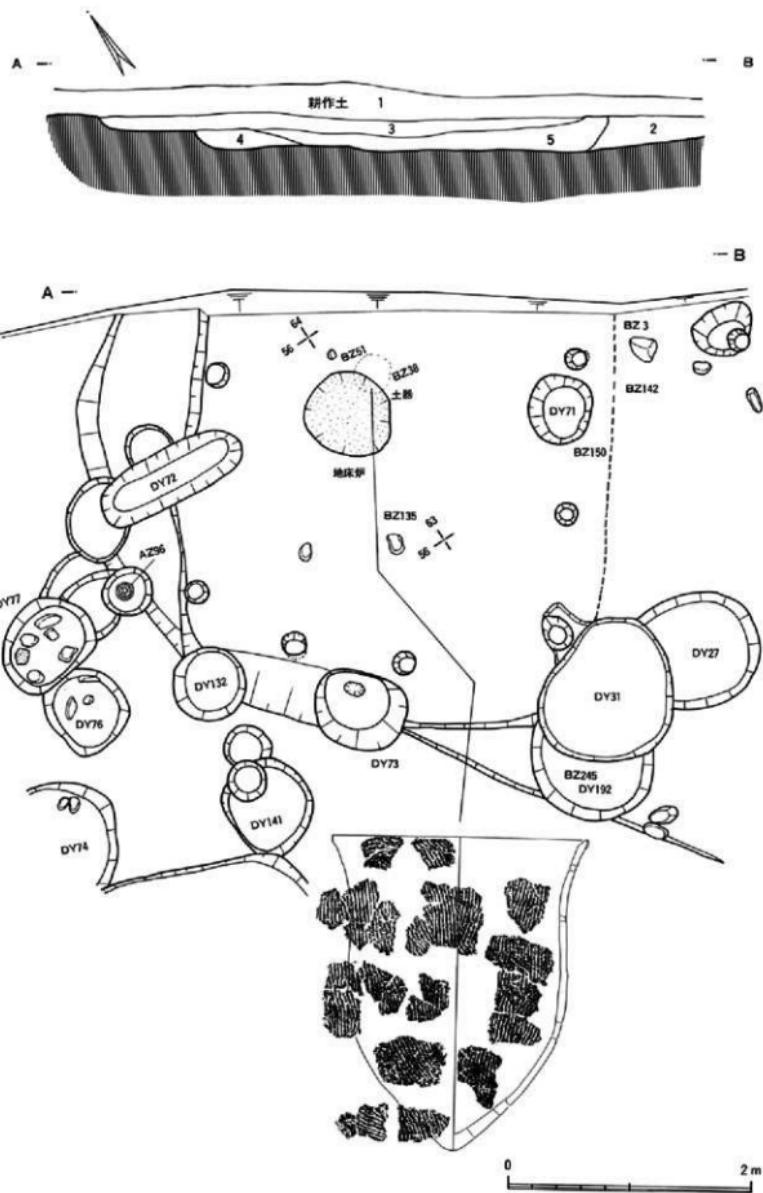
H Y220、221〔第4図〕

H Y220は約半分を、H Y221は約三分の一を完掘した。平面形状は梢円形を呈すものと考えられ、H Y220は長径(4.2m)、短径3.8m、H Y221は現長で2.6mを測る。H Y220は12本の柱穴、H Y221は5本の柱穴をそれぞれ確認している。両者とも炉跡は確認できなかった。

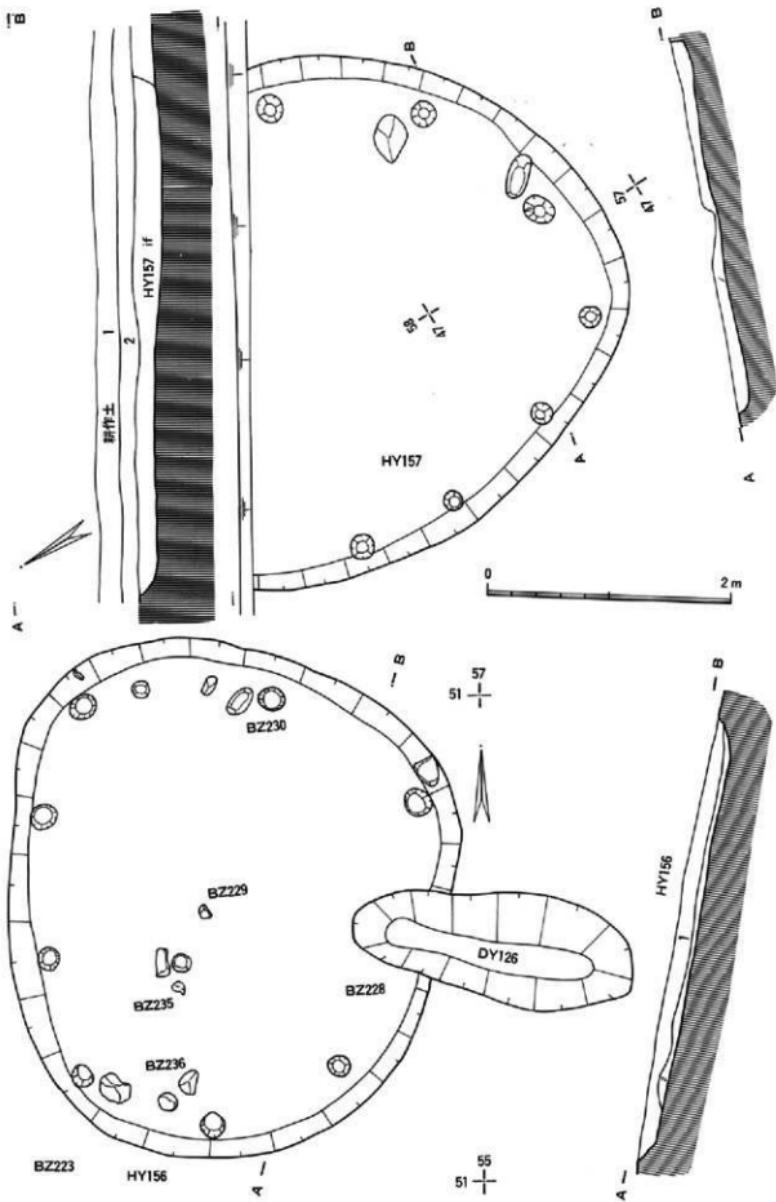
H Y228、229〔第5図〕

円形状に掘り方を有するH Y228は、長径3.9m、短径3.4mを測る。炉はなく、平坦な床面である。柱穴は、壁直下に13本配置されている。河原石を南北に1個づつ配している。台石として使用したものと考えられる。壁はゆるやかに立上がる。

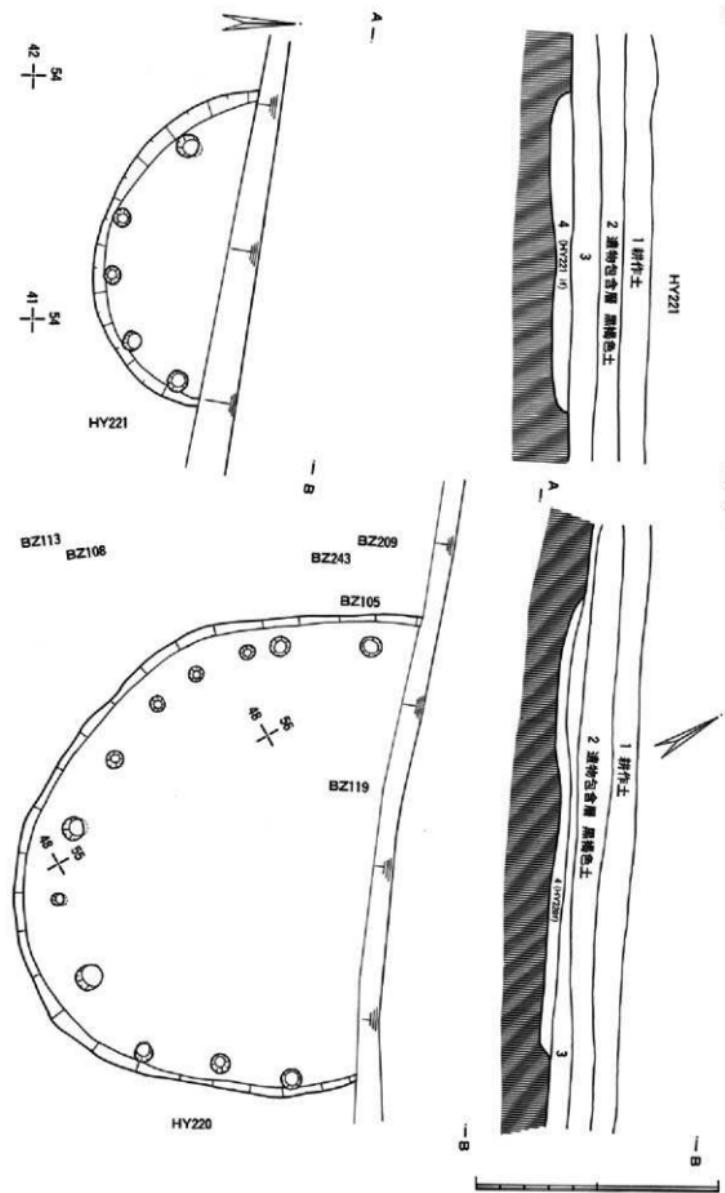
H Y228から東にむかって、ゆるやかに傾斜している地形で、H Y157、220、221は、H Y156や228、229より、低地に位置している。これらの事項から低地に位置するH Y157、220、221と微高地のH Y156、



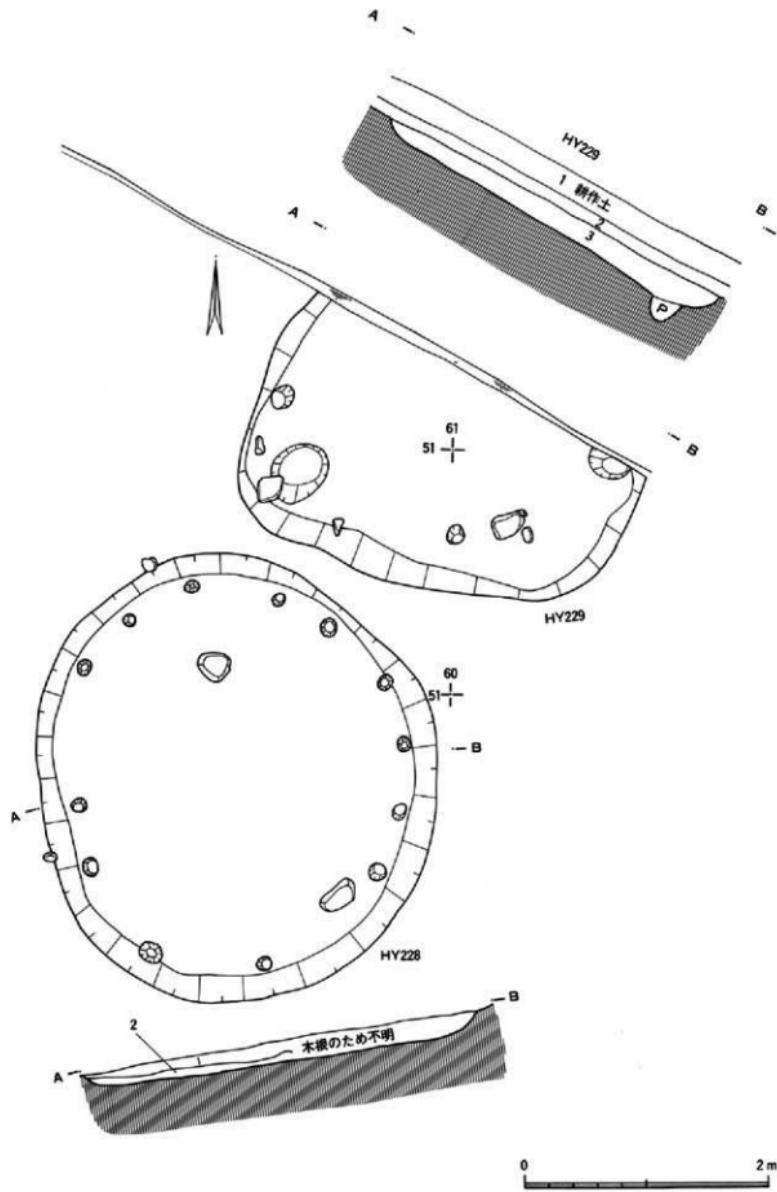
第2図 塔ノ原遺跡HY13平面図(1)



第3図 塔ノ原遺跡HY156,157平面図（2）



第4図 塔ノ原遺跡HY220,221平面図（3）



第5図 塔ノ原遺跡HY228,229平面図(4)

228、229は若干の時期差があると推測される。

HY229は隅丸方形を呈す平面形状であり、約3分の1を完掘した。長径(3.8m)、短径2.8mを測る。両者とも、炉は確認されなかった。

Ⅲ群土器に併行する遺構群(縄文中期未葉)

竪穴住居跡〔第6図、7図〕

調査区の北西部縁辺に集中して確認した竪穴住居跡である。HY230、83、3、4、5が重複して、発見された。HY230は覆土や平面形状から考慮すれば、縄文前期の可能性がある。ここでは、このHY230を除く4棟について説明したい。

HY3の西側直下は現在では綱木川が北流している。住居跡が削平された状況を呈していることはこの河川が西から東へ流れを変容させたことを物語っている。HY83は重複関係からすると、HY5と同様な年代があたえられる。整理するとHY3→HY4→^{HY5}_{HY83}の順で建てかえられたことを示している。土器埋設石組複式炉が変容する段階を示す遺構として位置づけられる。

HY3〔第6図、7図〕

平面形状は隅丸方形を呈し、南北に長径を有する。現況で(2.8m)、短径は東西に求められ、3.2mを測る。南方部に東西の長さ224m、幅20cm、深さは5~10cmの周溝が構築されている。

炉は、住居跡の床面を掘り込んで構築したもので、住居跡床面の南西部に位置する。炉は馬蹄形土器埋設石組複式炉である。長さは全長で1.24m、土器埋設炉は34cm、石組炉は50cm、灰原は40cmの規模を有す。埋設された土器は二次焼成を受けており、風化が著しく、復元は困難であった。柱穴は4本認められたが、いづれも浅い。

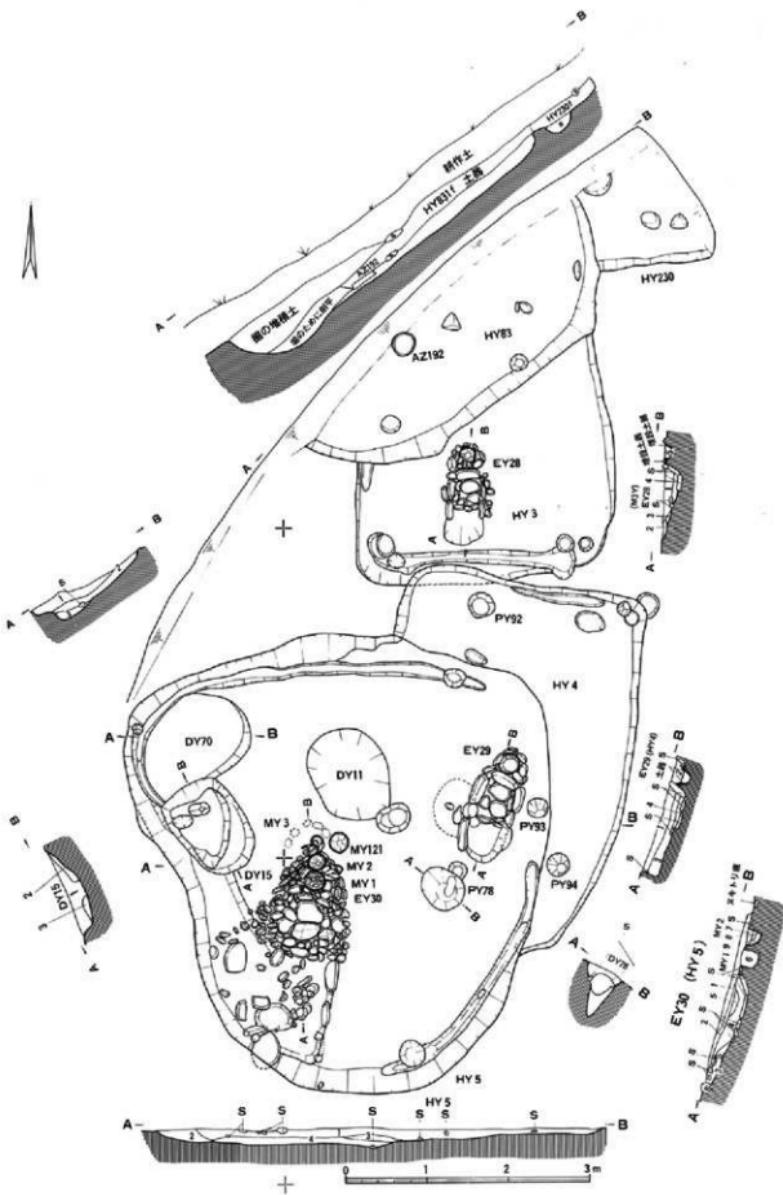
HY4〔第6図、7図〕

平面形状はHY3と同様な隅丸方形を呈し、短径3m、長径4.6mを測る。北側に長さ1.1m、幅10~18cmの周溝があり、東側の壁下に河原石を配置しており、出入口と推測される。柱穴はPY92、94と北東コーナ部にある。HY4に伴なう炉としてEY29がある。

HY3と同様な構築であるが、全長で20cm拡大している。埋設されていた土器はⅢ群a類に分類した土器群で第17図2とⅢ群d類の2点がある。大木10b式平併の土器群である。HY4の馬蹄形土器埋設石組複式炉の覆土からは、翠の石製品が出土している。(第37図3)炉としての機能をうしなった後に、墓穴として再利用したものと考えられ、翠は副葬品と考えられる。

HY5〔第6図、7図〕

平面形状は不整の橢円形を呈し、北方部の幅が広く、南方部は狭い、変形した平面形状を有す竪穴住居跡である。床面には3基の土壙、DY11、15、70が構築されている。HY5の炉は全長で3mを測る、四重土器埋設石組複式炉であり、東根市小林遺跡、本市の窓遺跡と並んで、山形県最大の複式炉である。図で示したMY121の地点には、もう1点土器が埋設されており、修理を加えた痕跡と考えられる。MY121は、第23図2の土器で、ほぼ完形である。その下にあったのが第19図の5であり、口縁部が欠損している。断面の観察から、第19図5の土器は埋設する際に意図的に口縁部を欠損したものと推測される。



第6図 塔ノ原遺跡HY 3, 4, 5, 83, 230平面図 (5)

H Y 5 に伴なう柱穴としては、P Y 78、他に南部の壁の箇所、北部の周溝東側に配置されていたもの想定され、3本～5本の柱が使用されていたものと考えられる。

H Y 5 から出土した主な遺物は、第21図1、2、がある。1は彩色有孔土器、2、漆が付着している注口土器である。埋設炉の土器については、各図に示したので参考されたい。E Y 30のM 1 とした埋設土器は復元が困難であった。

○堀立柱建物跡〔第8図～10〕

B Y 231、232、233の3棟を検出した。調査区の北西部に、東西方向に長軸を有し、構築されている。最も西に位置するのが、B Y 231、そこから4mほど東方に離れてB Y 233、さらに東方に6m行った地点にB Y 232が位置している。

B Y 231〔第8図〕

長径8.1m、短径4.7mで、東方部は尖状をなし、西方部は平坦な柱間隔の様相を呈す。D Y 63の柱穴が最も東方部に位置しており、D Y 63からD Y 38、D Y 63からD Y 162までの柱間隔は2.2mを測る。

その他の柱間隔は1.2m～1.9mとまちまちである。掘り込んでいる面には炉跡や、生活の痕跡を感じられない事から、上部構造は高床式の可能性が高い。

平面図で砂目のスクリントンが貼ってある箇所が柱痕跡である。D Y 63、38、162は明確に柱の痕跡をとどめていた。本市においては、大清水遺跡、法将寺遺跡で同様な建物跡が確認されている。

B Y 232〔第9図〕

長径5.9m、短径2.2mで、西方部が尖状を呈し、東方部が平坦である。柱間隔はP Y 194～P Y 193が60cm、P Y 193～P Y 151まで1.8m、P Y 151～P Y 59まで2.1mと、まちまちな柱間隔で構成されている。この掘立柱建物跡の南西にはM Y 21がある。第20図1の土器であり、口縁部が、後世の削平の際に欠損した痕跡を有する。

B Y 232と密接な関連を有する埋設土器と考えられる。住居跡の南側に埋設土器が伴なう例は多いが、今回の調査区においては、この一例しか確認されなかった。

B Y 233〔第10図〕

四本柱からなる建物と想定される。D Y 15、19、129等の土壌と重複して、構築されている。四本柱とすれば、やぐらに類似した建物が連想される。

○土壙〔第11図～15図〕

縄文中期に位置する土壙群は99基を数える。これらの土壙群は、第11図示すように平面形状や深さ、出土遺物等から吟味して、10形態に分類した。形態別の土壙の数は下記のようになる。

A 1類 10基、「V」字形に掘り込んでいるもの。

D Y 160、166、190、43、36、67、1、126、2、72

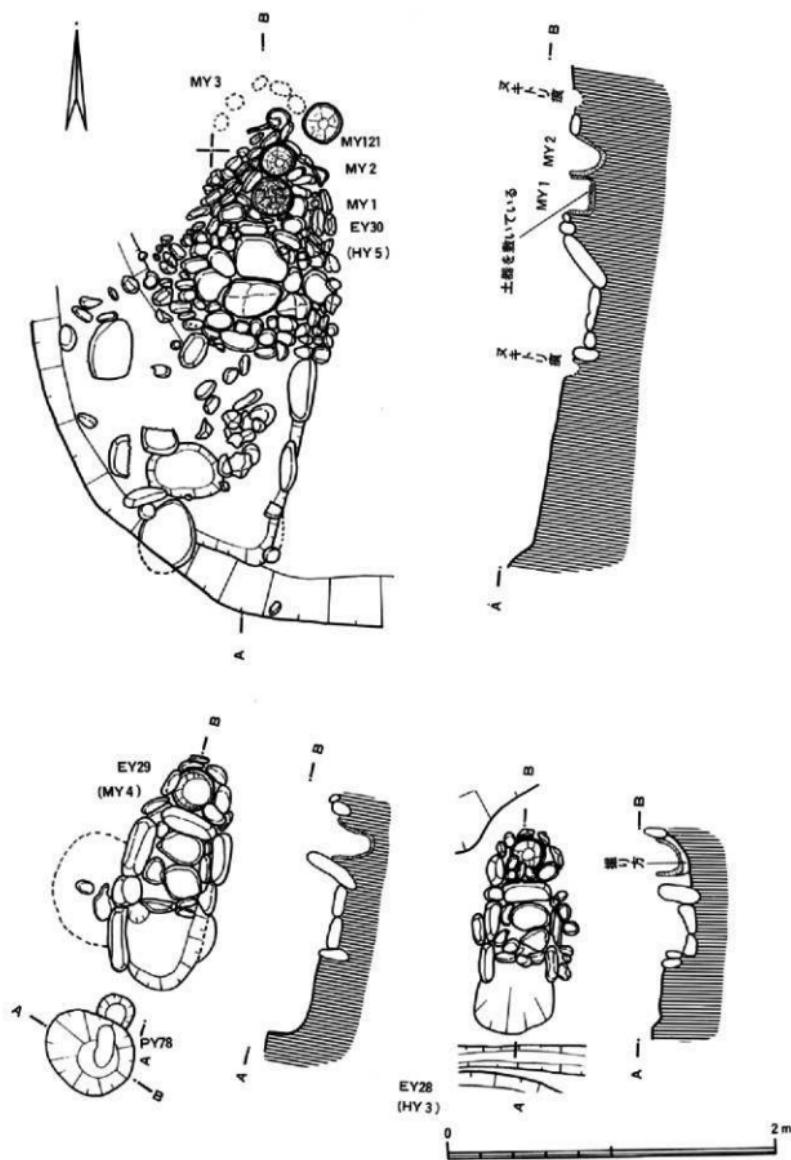
A 2類 2基、底面にピットを有するもの。

D Y 159、167

B 1類 3基 大型の形態を有するもの。

D Y 65、48、8

B 2類 23基 小型の形態を有するもの。



第7図 塔ノ原遺跡EY28.29.30断面図（6）

D Y52、111、7、21、22、70、15、73、31、79、143、219、211、222、216、163、27、187、164、198、113、193

C類 1基 土器を埋納しているもの。

D Y64

D類 2基 フラスコ状の掘り方を呈するもの。

D Y12、17

E 1類 12基 覆土上面に礫が認められないもの。

D Y74、24、213、223、25、41、50、167、176、18、47、68

E 2類 18基 覆土の上面に礫を配するもの。

D Y116、115、44、37、23、16、71、124、236、237、239、240、182、184、112、185、181、10

F 1類 19基 土器や礫を配するもの。

D Y119、15、11、145、122、55、56、77、76、186、118、40、32、96、87、129、35、158、128

F 2類 18基遺物をほとんど含まないもの。

D Y20、170、57、9、141、91、132、176、199、217、218、165、161、162、32、95、5、200

次に各類別に説明を加えたい。

A 1類〔第12図〕

落し穴説とトイレ説の両者がある土壤群である。覆土にはほとんど遺物を含まないのが特徴である。住居跡の近くに、多数の落し穴をつくるのは、不自然であり、トイレ説をここで採用したい。A II〔第13図〕については、底面にピットが認められることから落し穴と推測したい。

B 1、B 2類〔第14、15図〕

竪穴状を有し、多量の遺物を含むのが特徴である。破損土器等を廃棄した土壤であり、復元した第18図の完形土器をはじめ、文様が判別できる多くの遺物が出土した土壤もある。

C類〔第15図〕

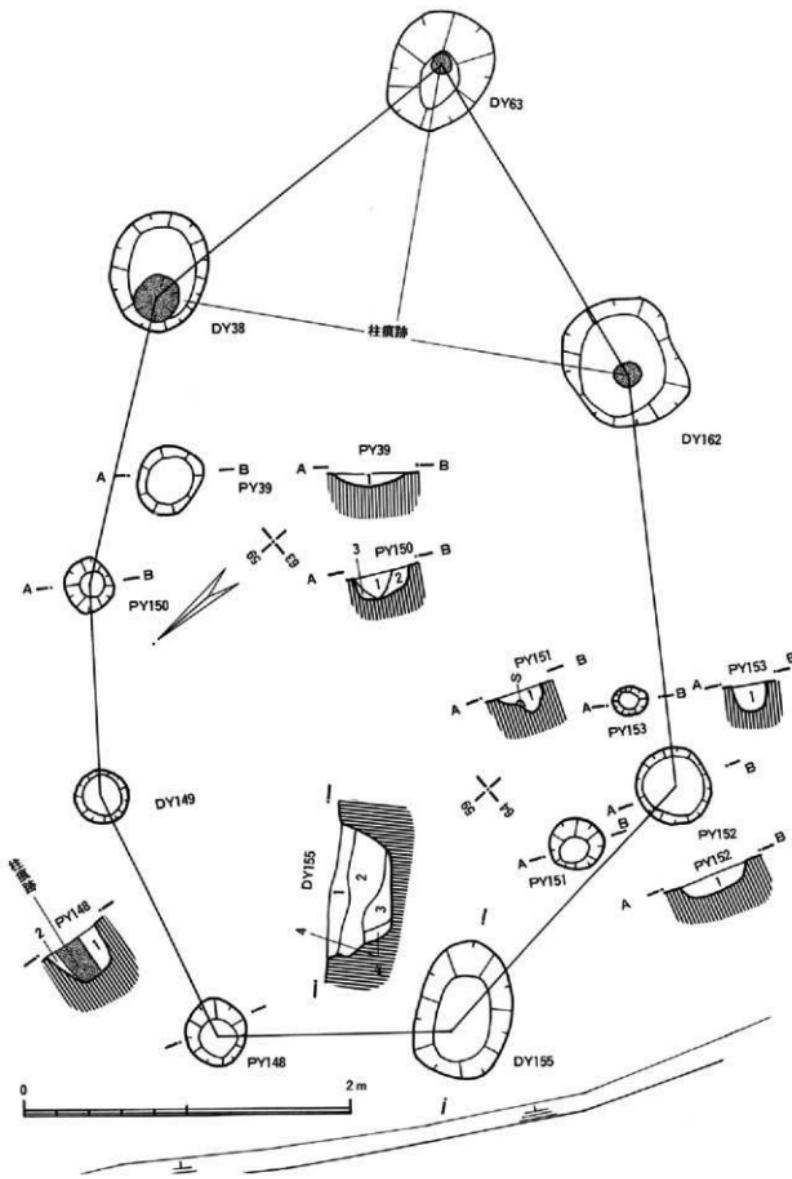
深鉢形土器をさかさにして埋納した状況を呈していた。底部は開田の際に削平されたものである。墓壙と考えられる。

D類〔第13図〕

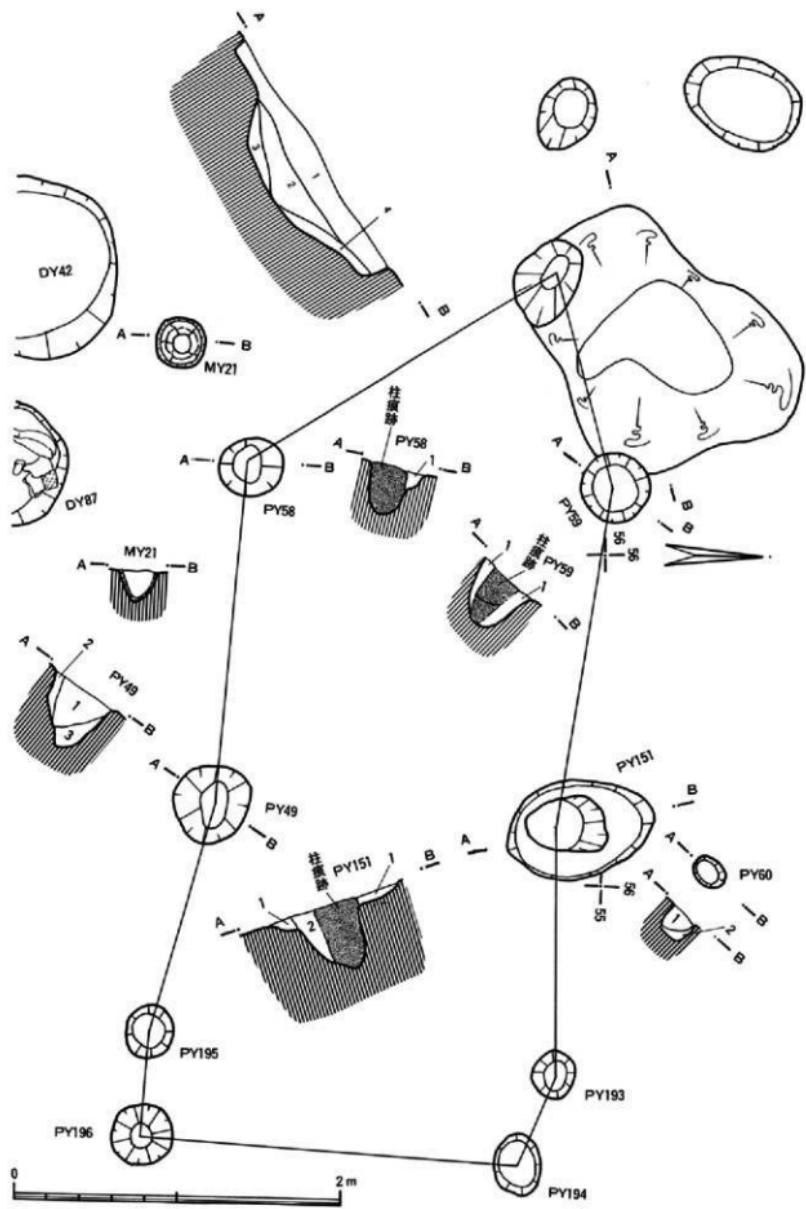
貯藏穴に多く見られる形態であるが、本調査区のフラスコ状土壤はいづれも浅い形態を呈する。

E 1、E 2、F 1類〔第13図〕

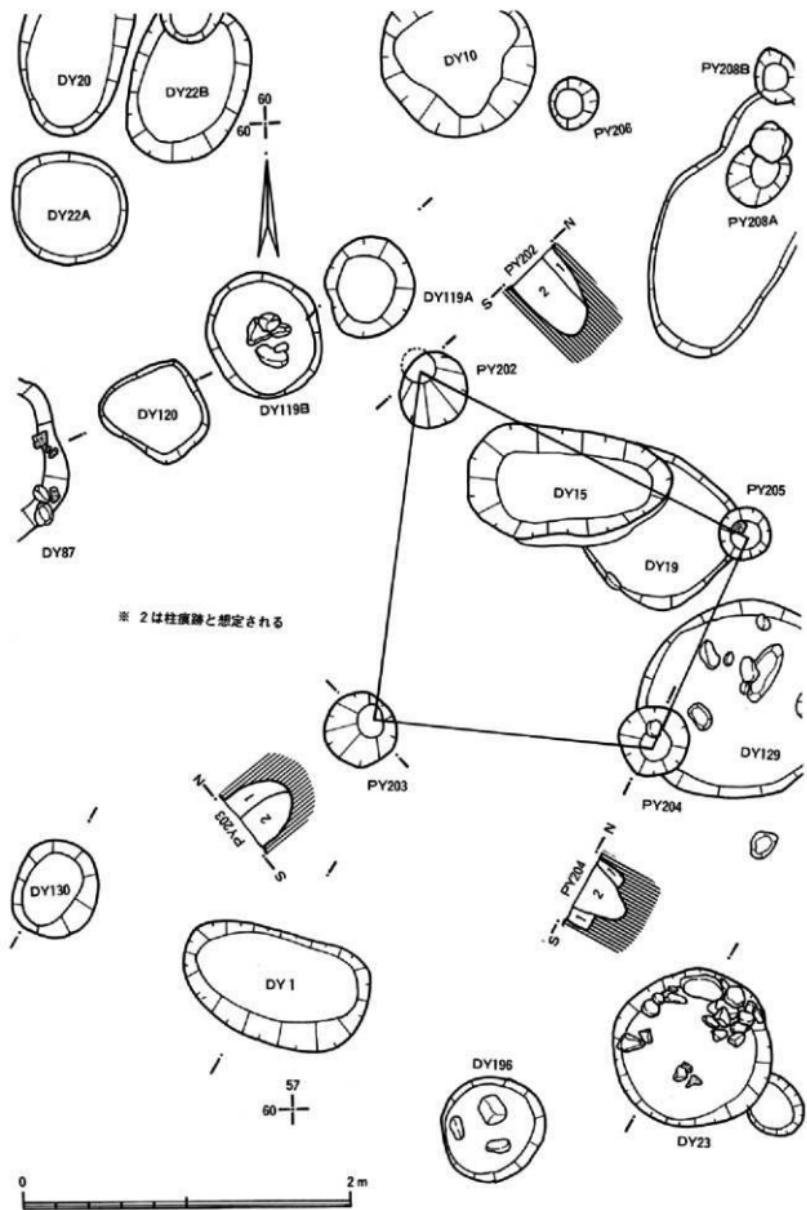
土壤の中央に意図的に礫を配置したD Y122や、石剣を3個に割って埋納したD Y10がある。これら土壤の特徴は、礫を多用することであり、土壤の上面及び覆土、底面のいづれかに配すのがこの土壤群である。南西方向のD Y184を中心とするグループ、東方のD Y25を中心とするグループ、北東方向のD Y168を中心として南北に延びるグループに分けることができ、各時期の墓壙と考えたい。覆土からは完形の磨斧第34図2や第21図3の小形土器がD Y185から出土している。副葬品と考えられる。



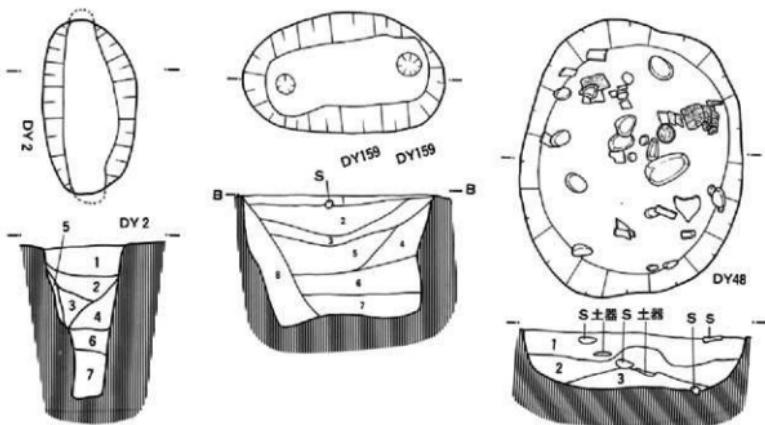
第8図 塔ノ原遺跡BY231平面図（1）



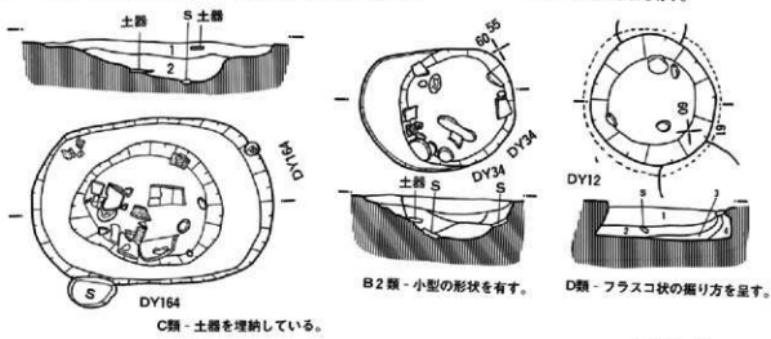
第9図 塔ノ原遺跡BY232平面図（2）



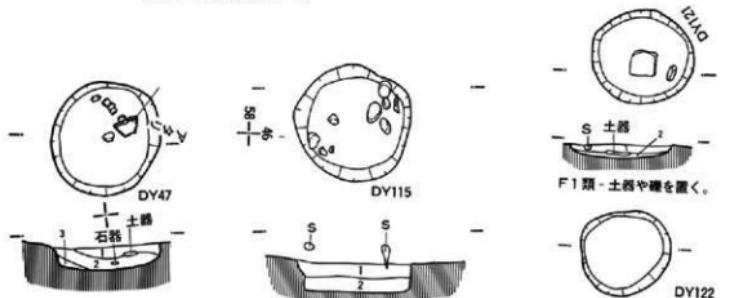
第10図 塔ノ原遺跡BY233平面図（3）



A1類 - 「V」字形に振りこんでいる。 A2類 - 底面にピットを有す。 B1類 - 大型の形状を有す。



C類 - 土器を埋納している。



E2類 - 覆土に礫を置く。 F1類 - 土器や礫を置く。 F2類 - 遺物をほとんどふくまない。

第11図 塔ノ原遺跡土壤分類図 (1)

4. 検出遺物

今回の調査区からは、総数17,030点の遺物が出土した。これらの遺物の中で出土数が最も多いのが土器片で10,793点、次いで剣片の5,618点、礫器368点、石器類26点、復元土器13点、拓影展開図土器3点、石製品9点であった。

出土状況は、遺構に伴なうものが最も多く、他は包含層出土で占められる。調査区で見ると、南部縁辺から北東部縁辺にかけての出土が大半で、遺構の集中に沿って遺物も集中する。

これらの遺物について、土器類は実測図、拓影展開図、展開図、石器に関しては実測図を作成したが、礫器については紙面の都合上、割愛した。石器に関しても、各群を代表する形態を選出して、実測図で示した。写真図版も、図示した遺物を記載した。土器、石器、石製品の順で説明を加えたい。

○土器

出土した土器は、口縁部片712点、底部片289点、他は胴部片で占められる。これらの土器群は器形や、文様表出技法、文様構成、単位文様、区画文様等から、I群～III群に大別される。さらに細分を加えて述べる。

○I群土器〔第16図1、第24図1～7〕

本群土器は総数で69点出土している。出土地点としては、調査区の北方端部に集中し、包含層のII層下面からIII層に多く認められる土器群である。個体数としては、約8個体分と想定される。本群土器はa類～c類の3形態に細類され、縄文前期初頭に位置す土器群である。

I群a類〔第16図1〕

土器拓影展開図で示す器形と想定され、折り返し口縁を有する。胎土には大粒の石英砂と纖維を少量含み、焼成は良好である。色調は黒褐色を呈し、表裏撚糸文を施す。地文となる撚糸文は内面、口唇部は顯著であるが、他の器面は部分的に施文している。

本群土器は上川名I式併行と考えられるが、表裏条痕文土器が共存しないことから吟味すると、縄文早期未葉と縄文前期初頭をつなぐ時期に位置づけたい。

I群b類〔第24図1～4、6〕

深鉢形を有す土器群と想定される。いづれも焼成は良好で、色調は赤褐色、胎土に多量の纖維と少量の石英砂を含む。口唇部に縄文原体を斜状に押圧した1・3と、ヘラ状工具による斜位の短沈線を施した土器群である。4は口唇部にも、細沈線を施している。地文は羽状縄文、斜状文で、縄文原体は前々段多条の縄5本～8本を用いている。縄文前期初頭の関山式、桂島式に併行する土器群としたい。

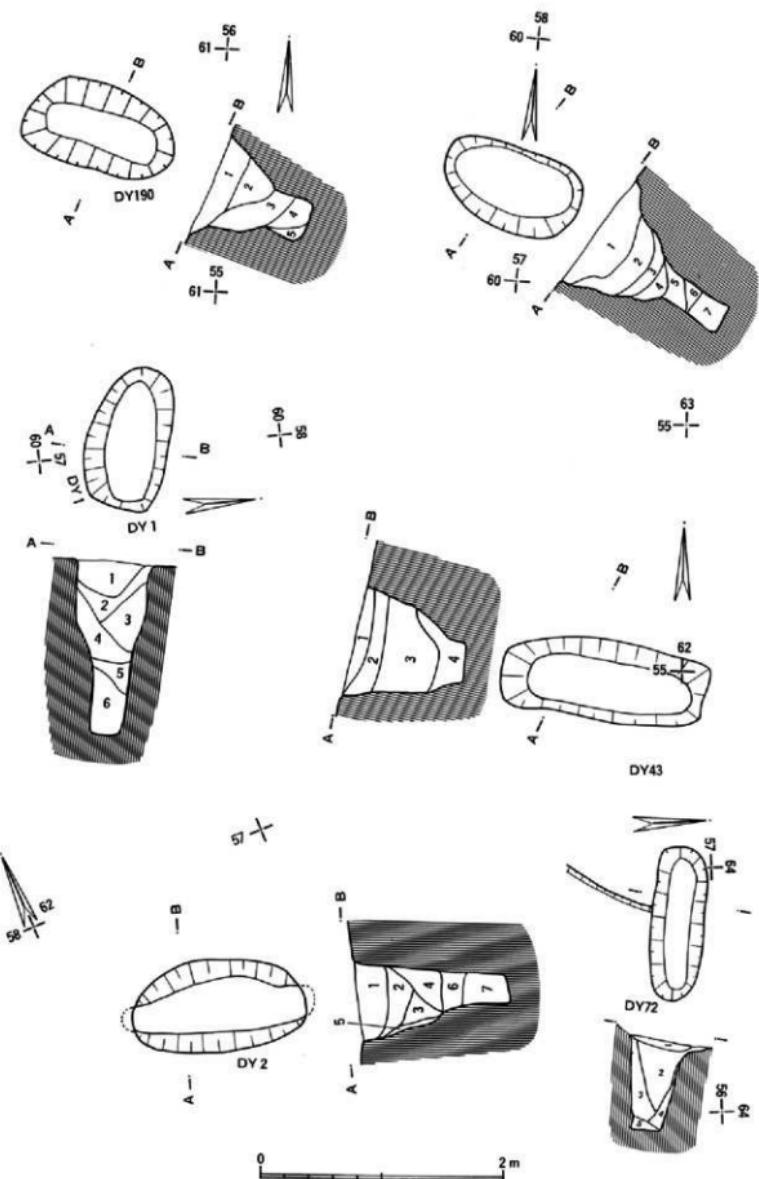
I群c類〔第24図5、7〕

小形土器であり、5は折り返し口縁、7は胴部破片で「ハ」状の沈線文を施した土器片である。本市の一ノ坂遺跡からも、類似する土器が出土しており、I群b類と同様な時期に位置づけられる。

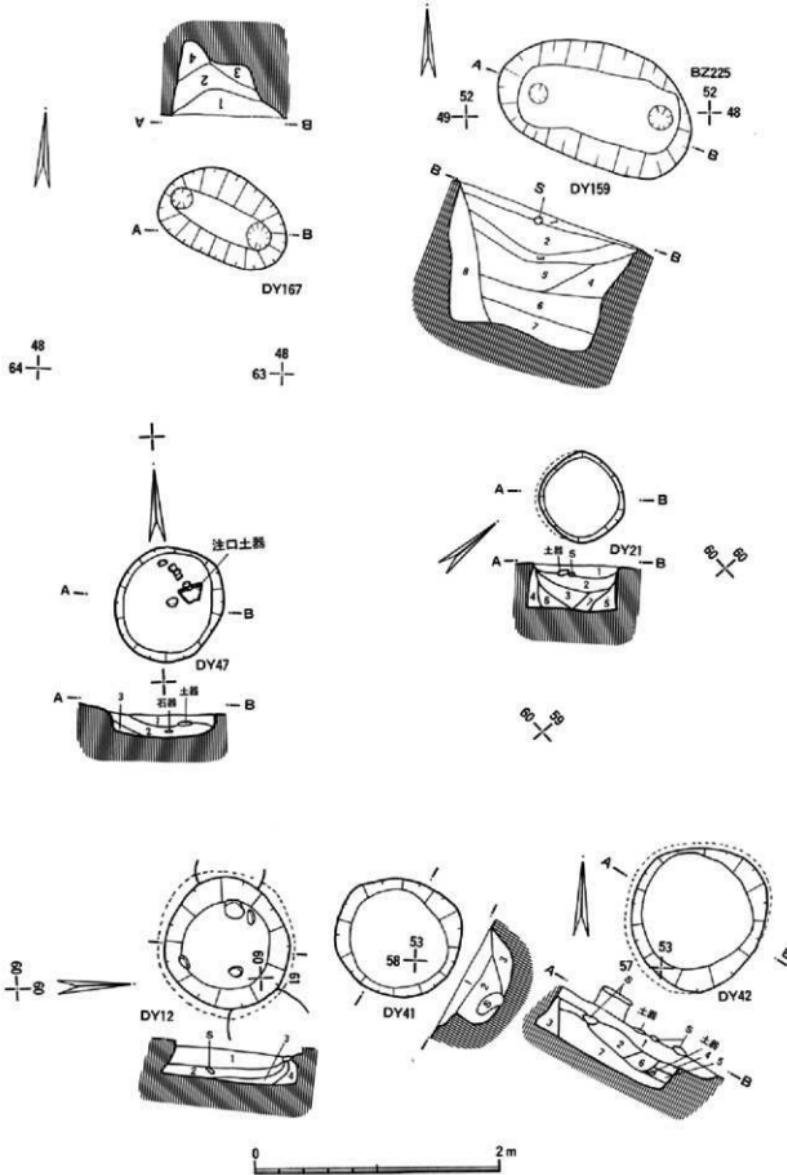
○II群土器〔第16図2、第17図1、第24図8～17〕

本群土器は磨滅が著しいのが特徴であり、総数で265点出土している。出土地点としては調査区の北東部に集中する。このことから本群土器を伴なう遺構群は調査区の北部に位置すると想定されよう。

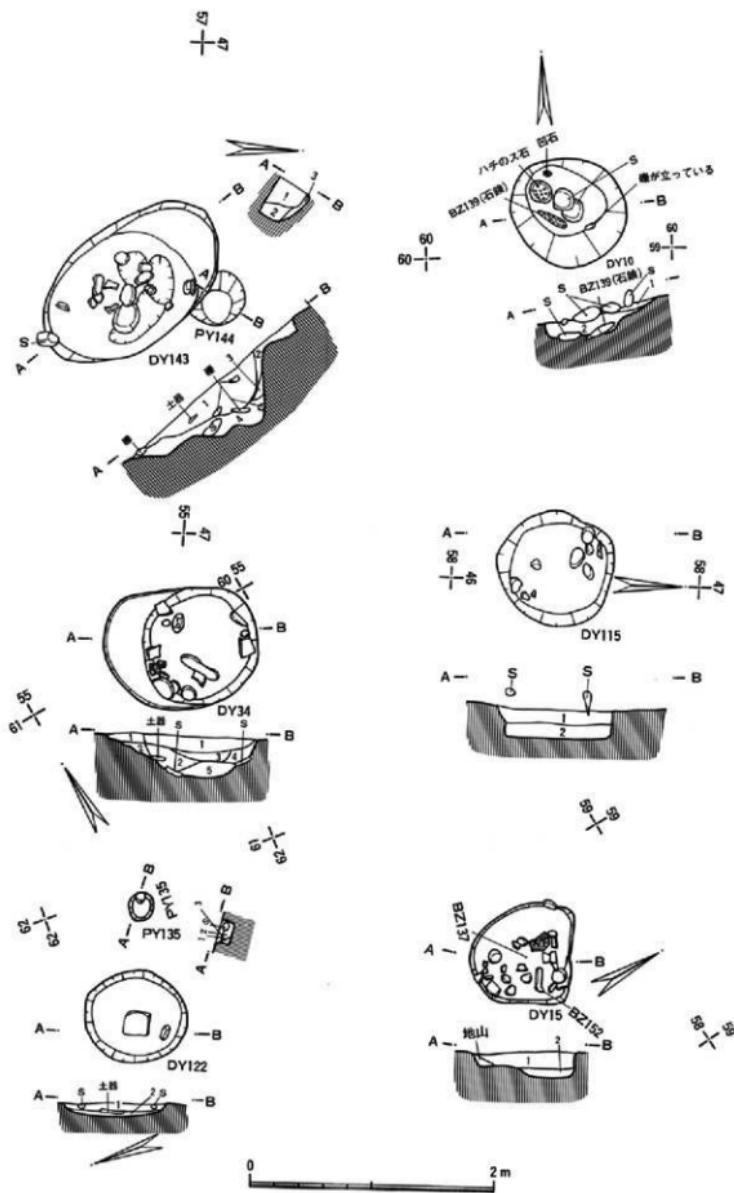
本群土器は大木5式併行の土器群で、文様表出技法からa類～c類の3形態に細別される。



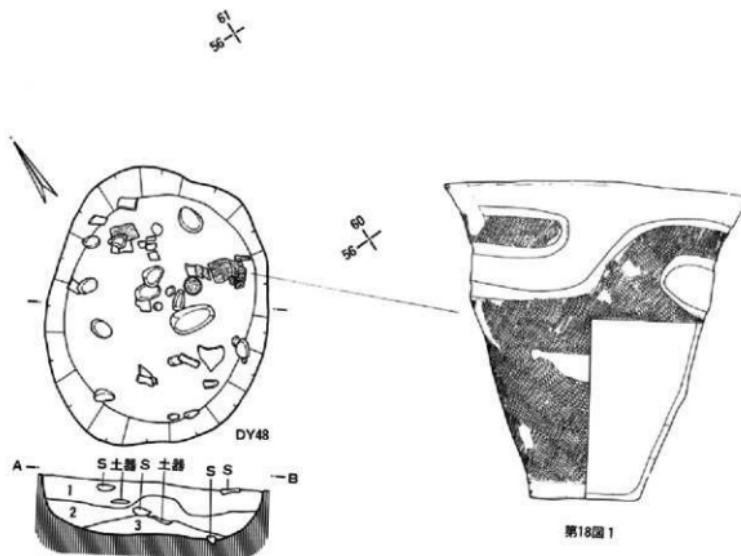
第12図 塔ノ原遺跡土塁平面図（2）



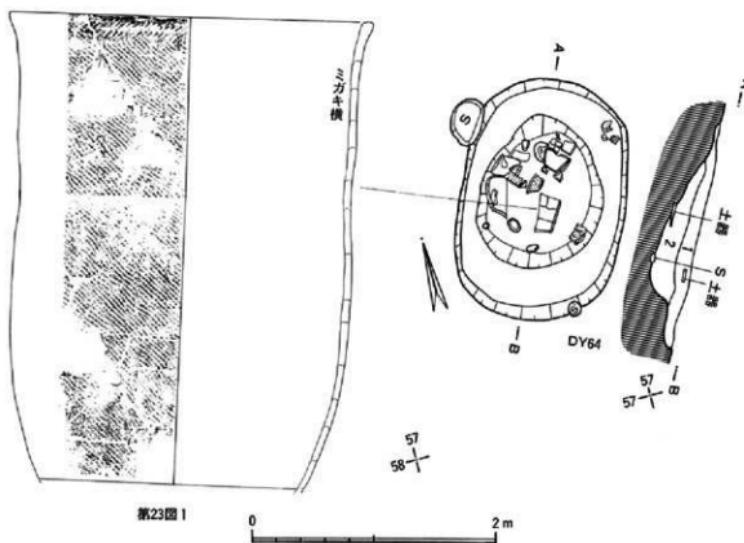
第13図 塔ノ原遺跡土壤平面図 (3)



第14図 塔ノ原遺跡土壤平面図(4)



第18図1



第23図1

0 2m

第15図 塔ノ原遺跡土壤平面図 (5)

II群a類 [第16図2、第24図11~17]

粘土貼付文を施したグループで、二条を単位とした貼付文と單一の貼付文の二者が認められる。前者は第24図11~17、後者に第16図2がある。土器拓影展開圖で示した第16図1は、外反する深鉢形で、口唇部に粘土貼付文による連続した突起文を有する。その直下に二条の波状文を施しており、胴上半部には継位に二条の波状文が認められる。地文となる繩文を施した後に文様を施している。土器面の觀察から貼付した粘土が欠損しているのが認められ、本来は器面全体に文様があったことを示している。

第24図11~14、17は内反する浅鉢形土器と想定され、第16図2より、細い粘土貼付文で文様を構成している。15は口唇部に交互に貼付した突起部を施しただけの無文土器で、第16図2と同様な器形と考えたい。色調は第24図11~14、16、17の土器片は黒褐色、第16図2、第24図6は黄褐色で、両者とも胎土に少量の纖維と石英砂を含む。特に黄褐色を有する土器片は磨滅が著しい。

II群b類 [第24図8~10]

棒状工具による沈線文を有するグループである。断面が「U」字状を呈する沈線文であり、10は底部に近い土器片、9は胴上部片、8は口縁部片である。地文の繩文を施した後に二条の山形文を横位に展開する文様構成である。10の底部に近い破片にも文様が認められることから、器面全体に文様を施したものと想定されよう。器形は外反する深鉢形土器と考えたい。

II群c類土器 [第17図1]

図で示す器形と想定され、断面は薄く、焼成は良好で褐色であり、これらの要素はII群土器の中では異質である。文様は貝殻文を模倣したものである。ヘラ状工具を用い、二条の細沈線で方形状に区画した間を、櫛形状工具を用い、連続突刺文を施している。破片であることから全体的な文様の構成は不明である。この土器片は、北関東地方の一部に見られる興津式土器に類似するものと考えられる。

興津式土器は、茨城県興津貝塚出土の土器を標式にした土器様式である。また、この文様表出技法は本遺跡から出土した、石製品（第35図3）と同じ、文様表出技法であることを加えておきたい。したがって、石製品も、この土器片の年代と言えよう。a・b類と同様に、大木5式に併行すると考えられる。土器は搬入品と考えられるが、石製品は地元の礫を使用していることから推測して、本遺跡で製作された可能性が大である。

○Ⅲ群土器

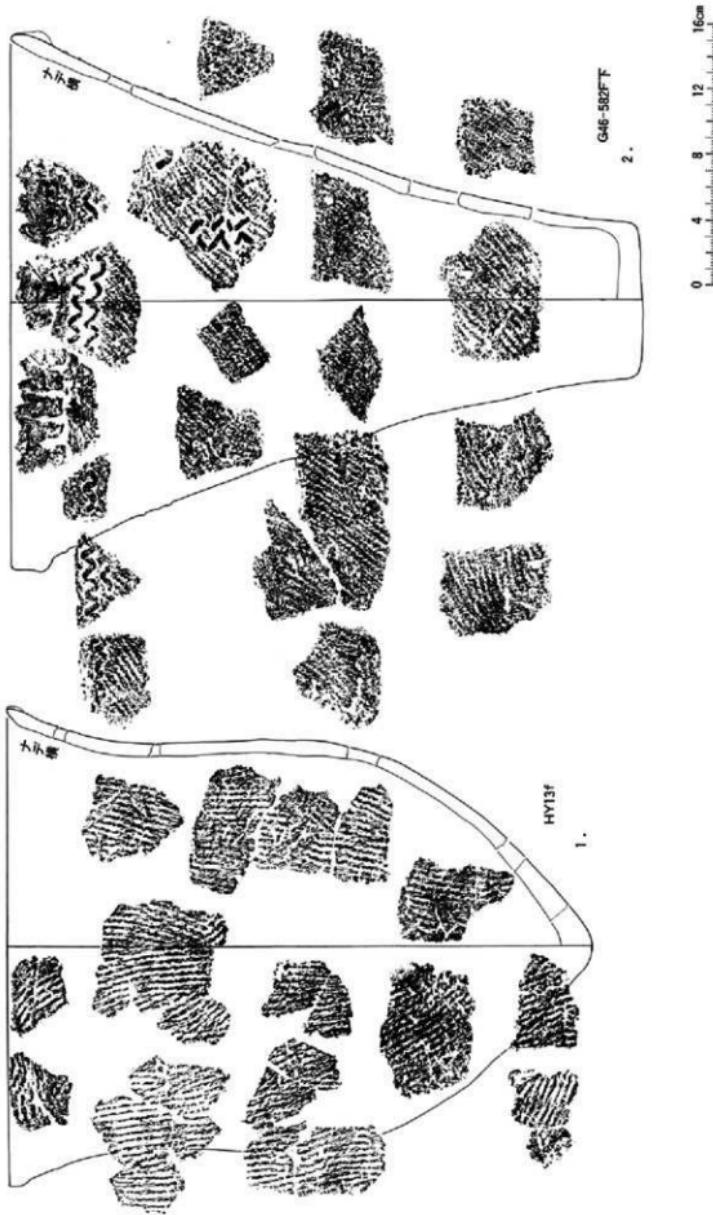
総数で10,459点、復元土器13点がある。底部片から判断して少くとも約90個体分の土器片と判断される。復元した土器の大半は造構内出土であり、HY5からの出土が最も多く認められた。

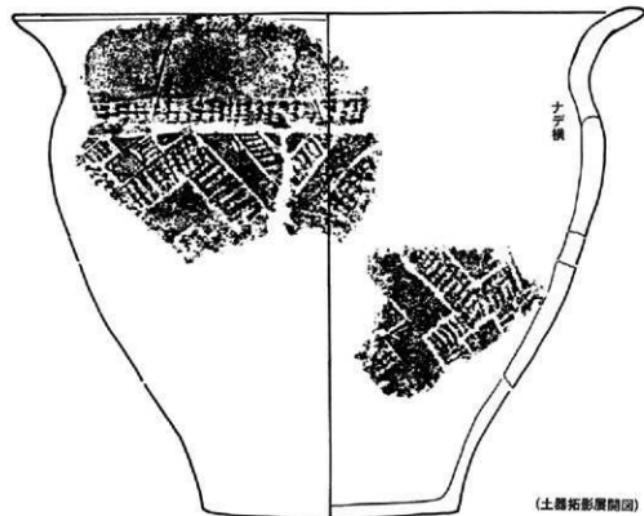
他にはD-Y48等の大型土壙からの出土が上げられる。色調は、赤褐色、黄褐色が主流である、胎土には纖維を含まない。焼成は良好であるが、二次焼成を受けた土器が約3割あり、もろくなっている。また開田の際に削平されたと思われる土器片もあった。

これらの土器群は繩文中期に位置する土器群であり、第24図1、2、3を除き、大木10b式を中心とする土器群である。器形や文様構成等はバラエティに富んでいるが、文様表出技法としては、沈線文系と稜線文系が主流であり、隆線文、粘土貼付文、突刺文はごく一部に見られるだけである。

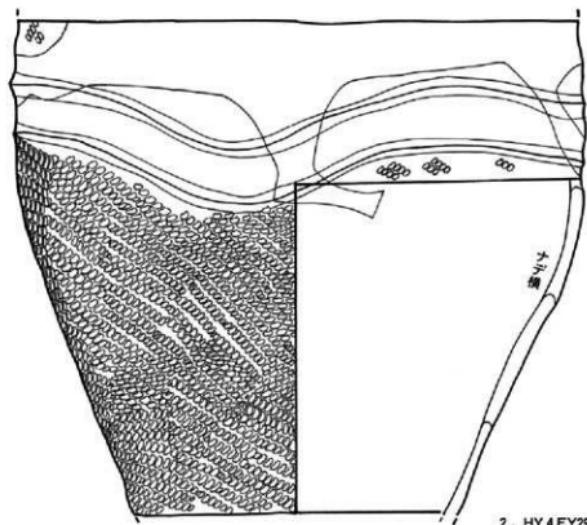
また、文様をもつ土器（精製土器）、文様をもたない土器（粗製土器）の割合は、前者が4割、後者は6割であった。主に器形や文様から細類するとa類～i類の9形態に細別される。

第16図 塔ノ原遺跡出土土器拓墨圖版(1)





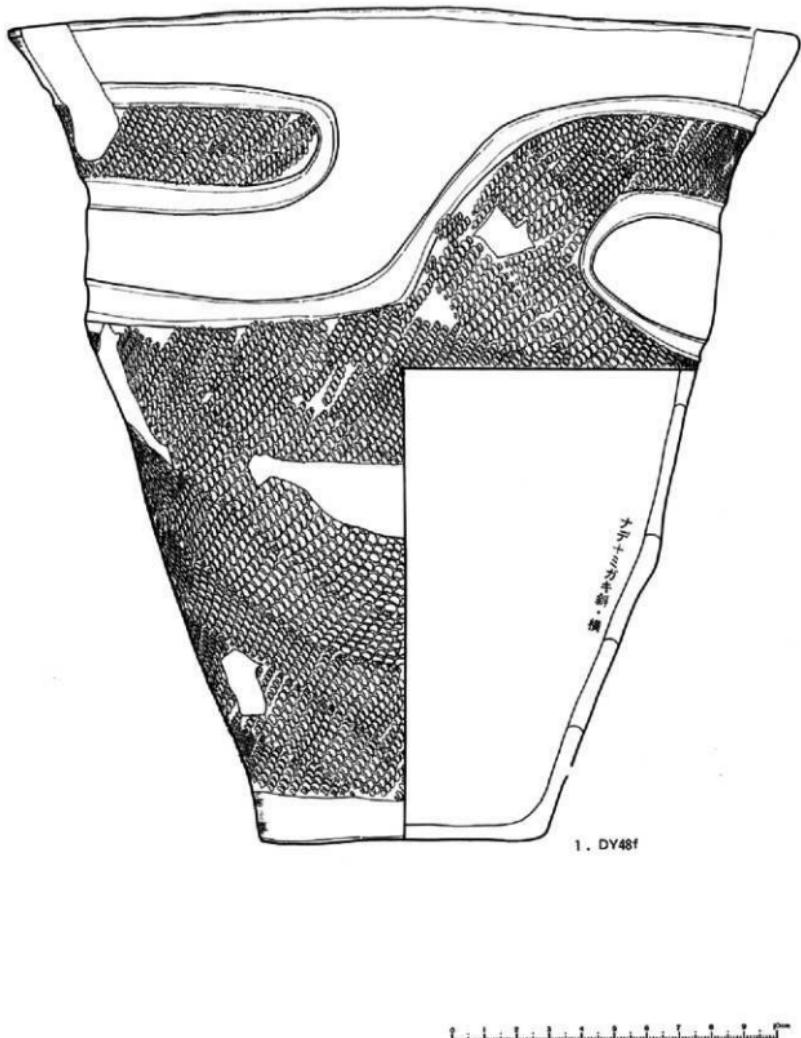
1. G54-582F下



2. HY 4 EY29埋設土器

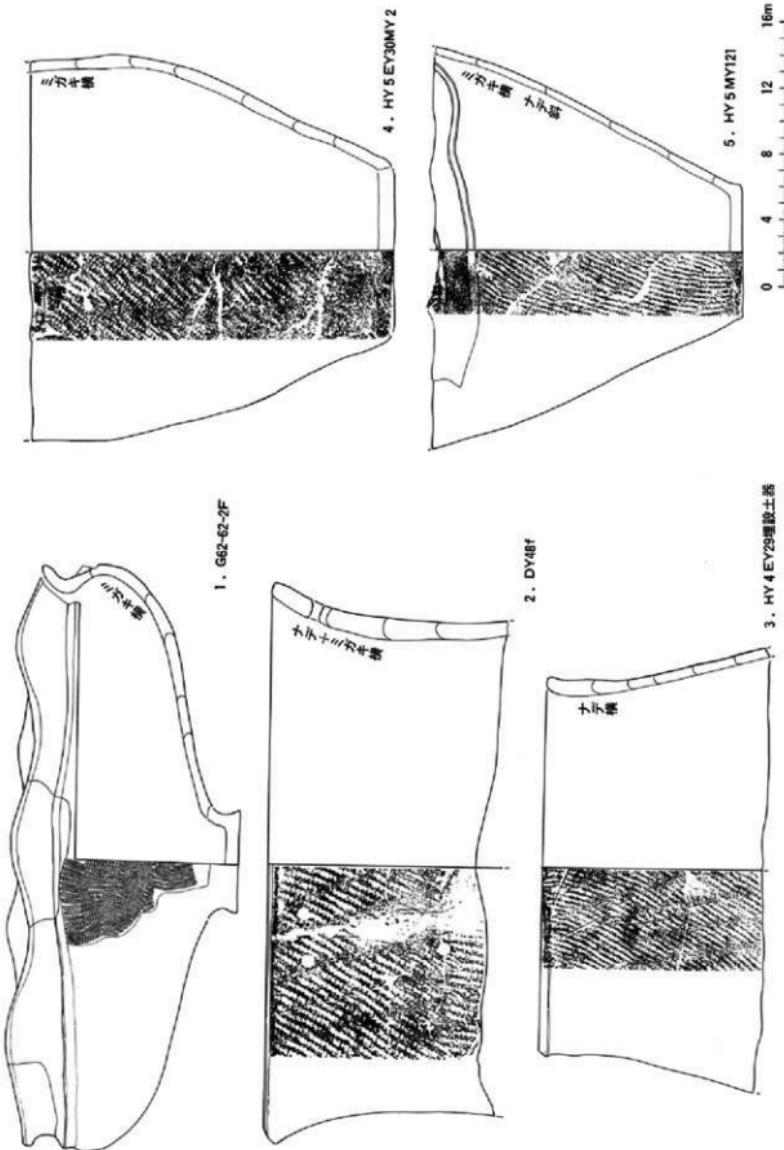


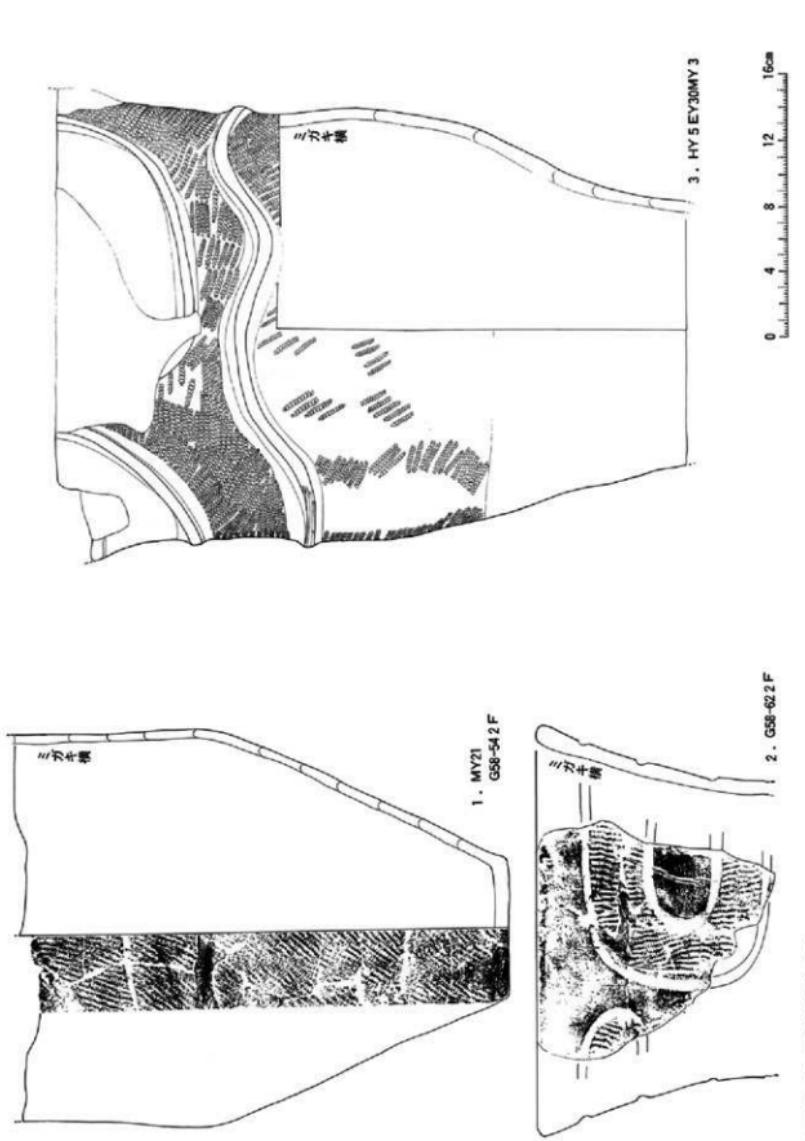
第17図 塔ノ原遺跡出土土器実測図 (2)



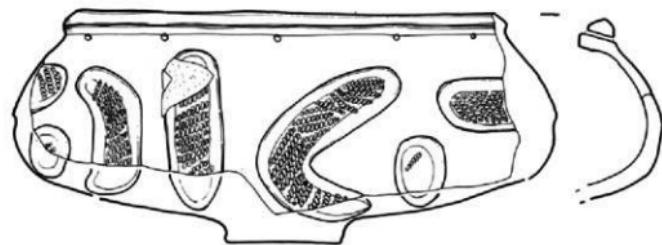
第18図 塔ノ原遺跡出土器実測図（3）

第19図 塔ノ原遺跡出土土器実測図（4）

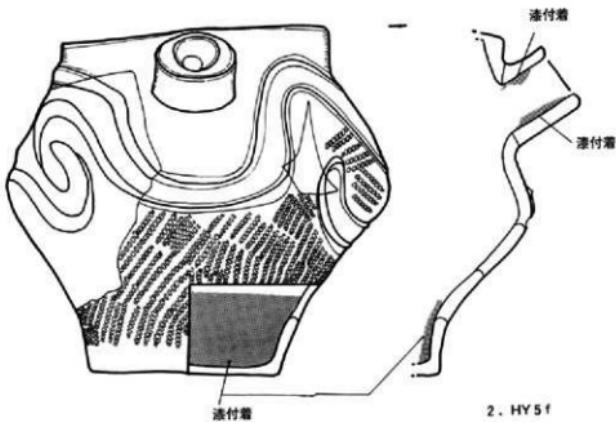




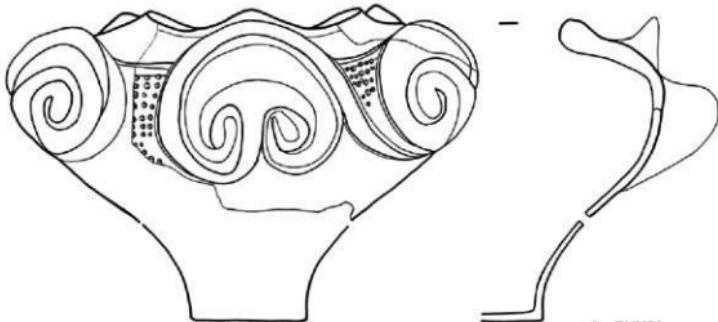
新20圖 塔ノ原遺跡出土土器素測図（5）



1. HY5f



2. HY5f



3. DY185f



第21図 塔ノ原遺跡出土土器実測図 (6)

第22図 塔ノ原遺跡出土土器展開図（7）

0 5 10cm



第19図 1

DY48F



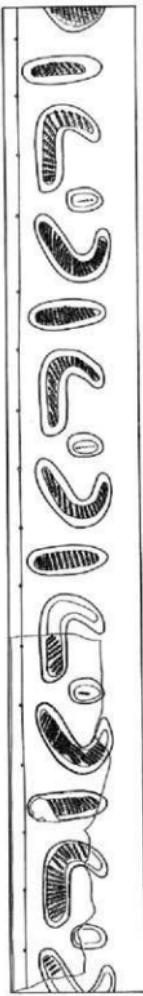
第21図 3

DY185F



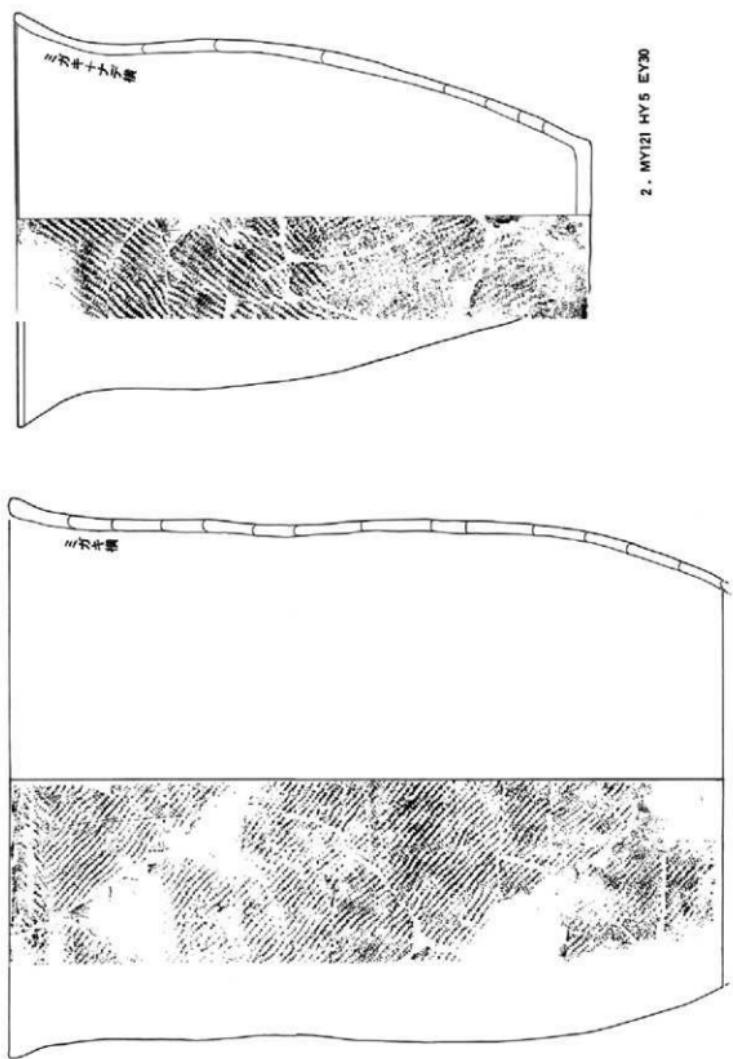
第21図 2

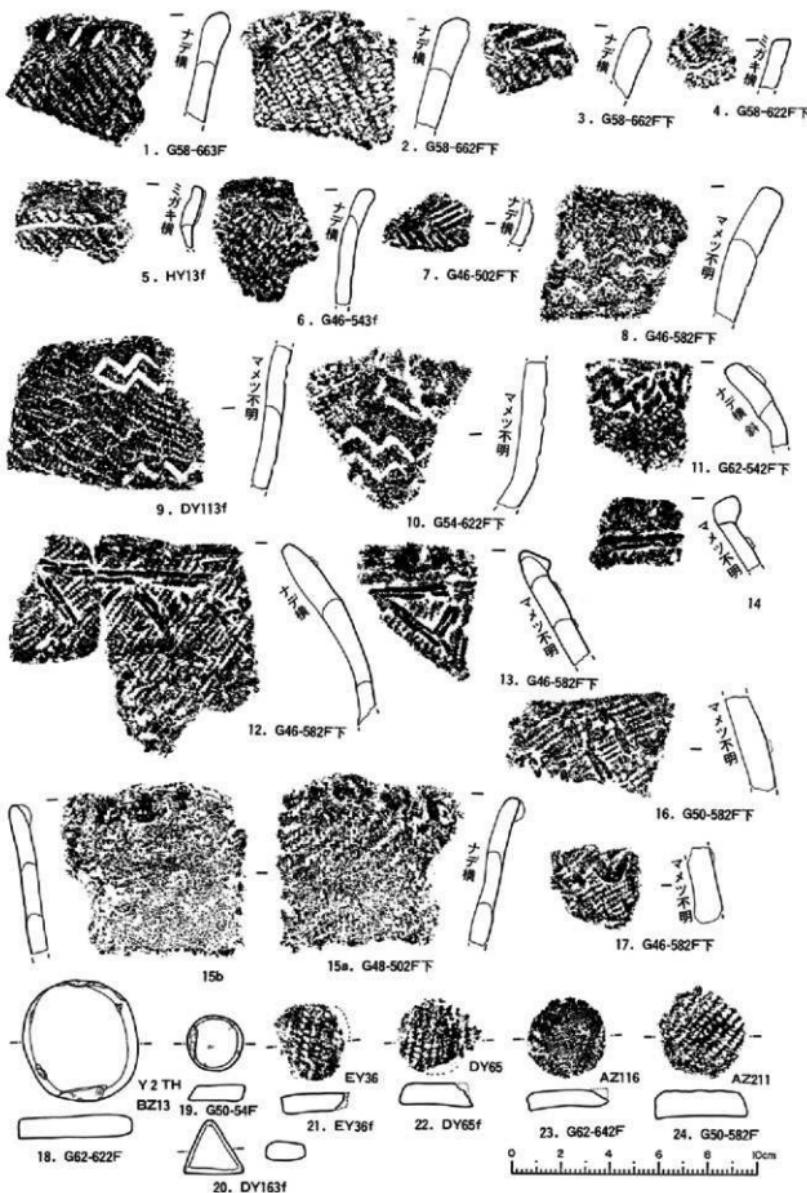
HY5f



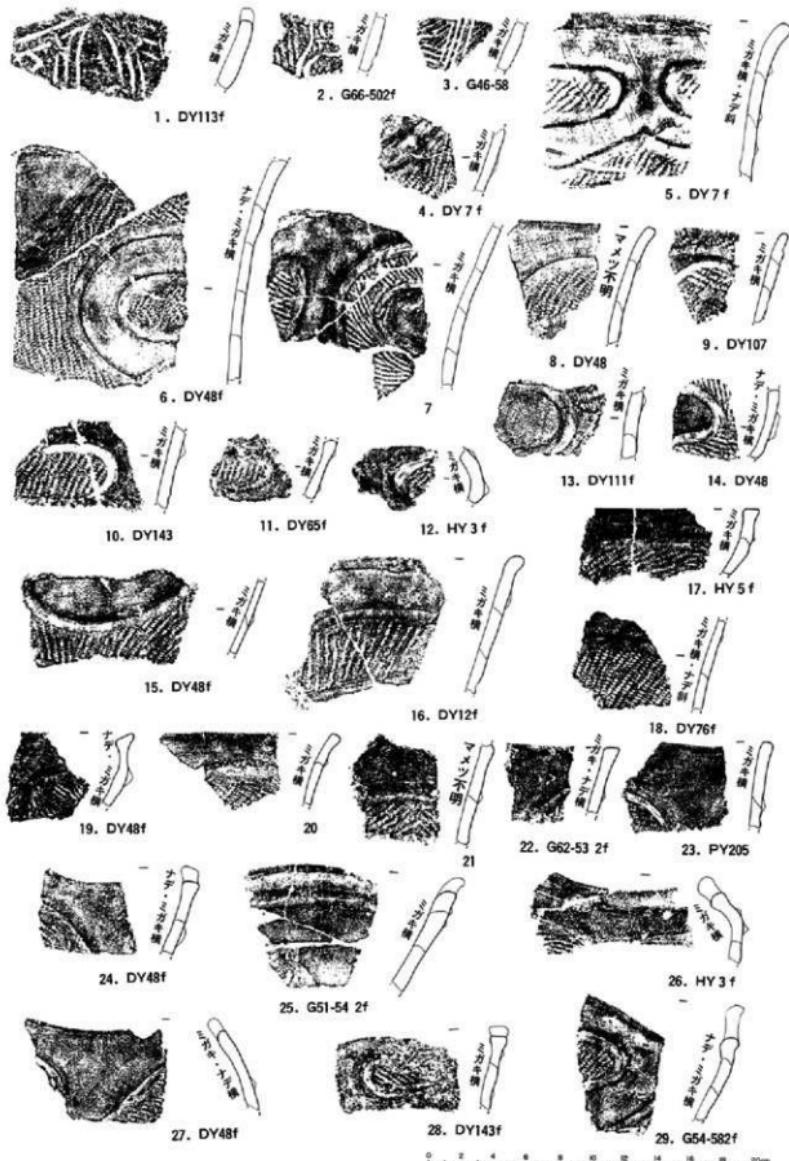
第21図 1

第23圖 塔ノ原遺跡出土土器測量図(8)



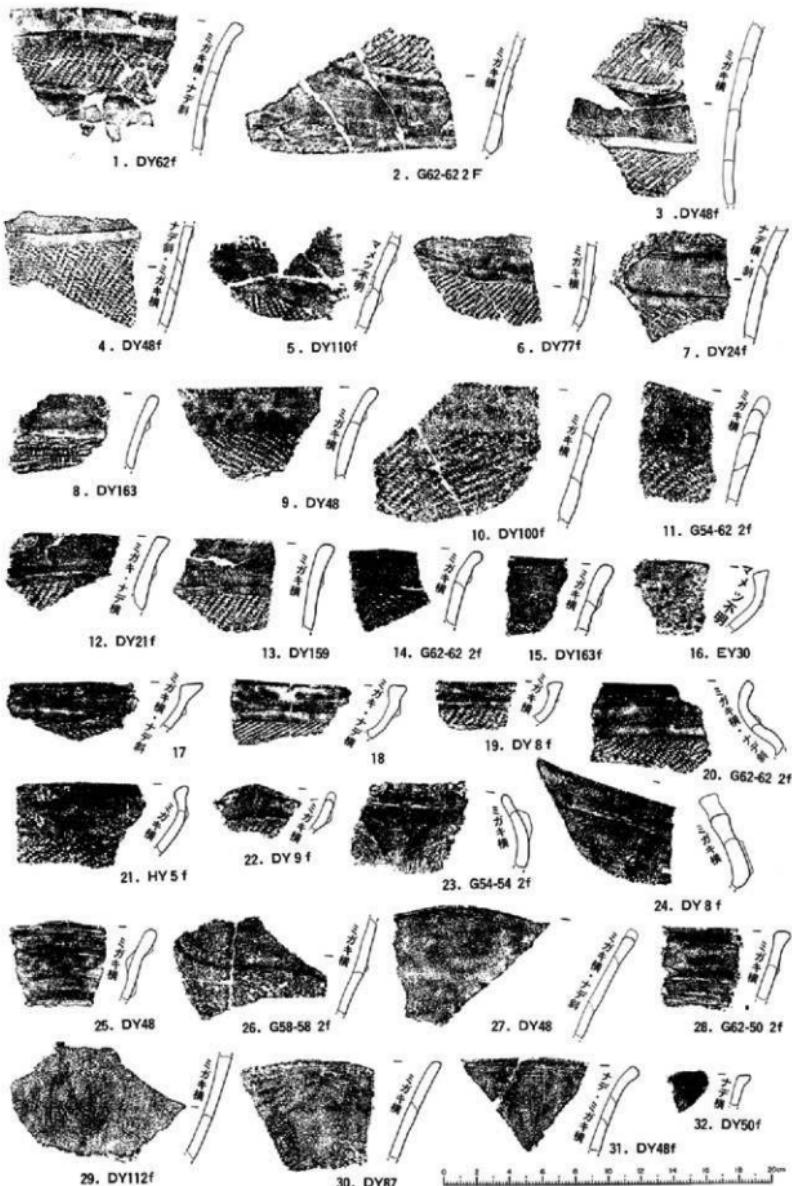


第24図 塔ノ原遺跡出土土器拓影図（1）

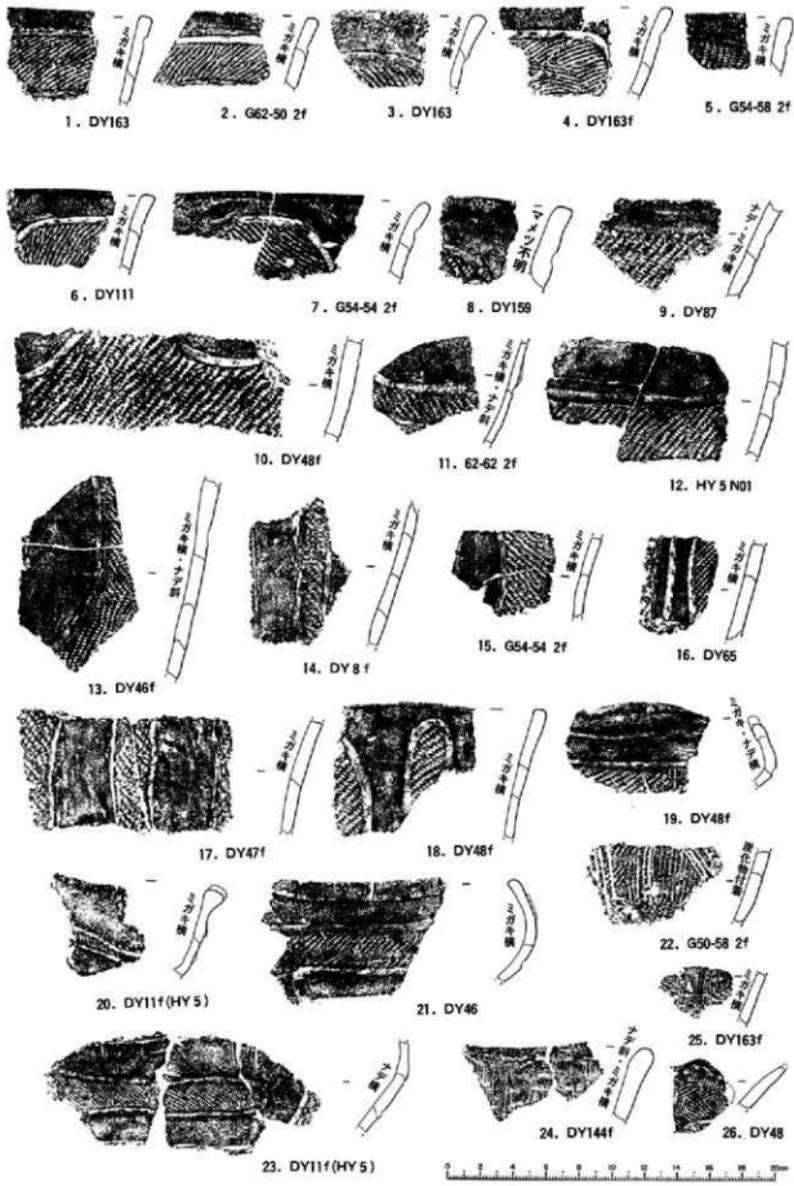


0 2 4 6 8 10 12 14 16 18 20 cm

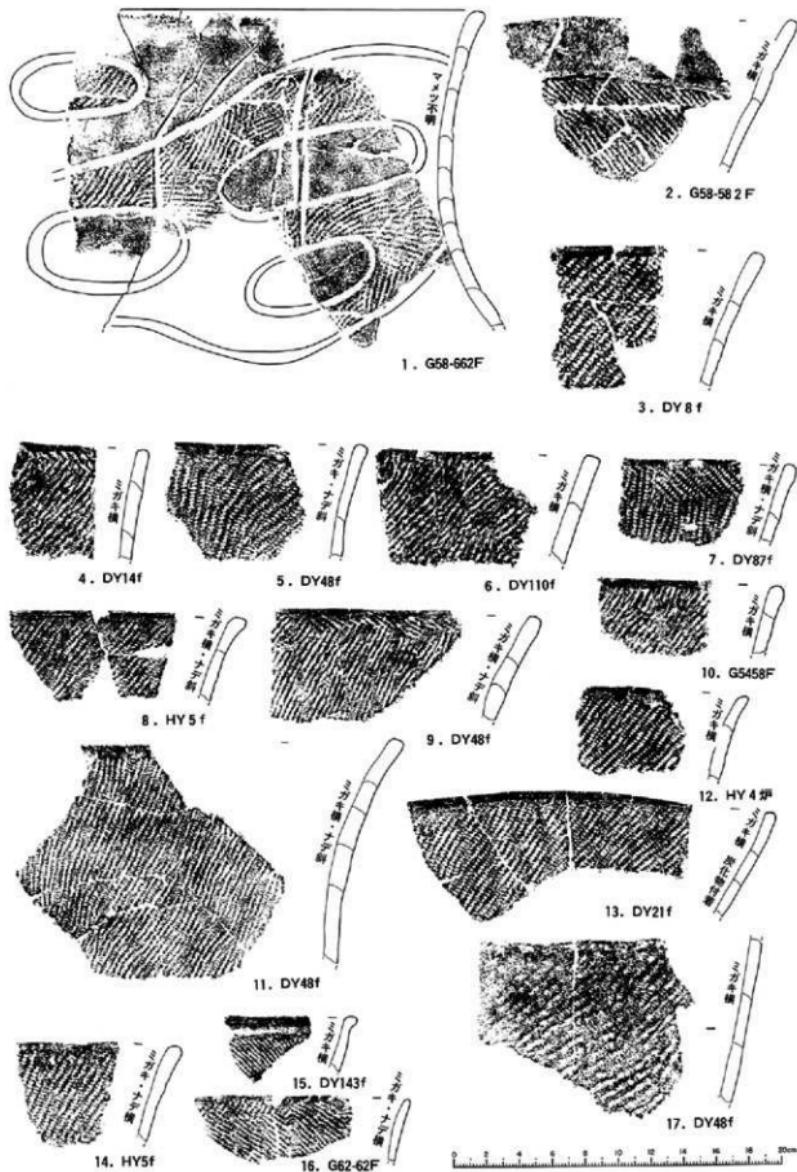
第25図 塔ノ原遺跡出土土器拓影図（2）



第26図 塔ノ原遺跡出土土器拓影図（3）



第27図 塔ノ原遺跡出土土器拓影図（4）



第28図 塔ノ原遺跡出土土器拓影図（5）

Ⅲ群土器を下記に細類し、説明したい。

Ⅲ群 a 類—精製土器で、文様帶を陰線文や棱線文で区画する土器群

Ⅲ群 b 類—精製土器で、文様帶を沈線文で区画する土器群

Ⅲ群 c 類—一口唇部に無文帯を配し、それ以外は縄文原体で施文した土器群

Ⅲ群 d 類—一口唇部から縄文原体を施文した土器群

Ⅲ群 e 類—浅鉢形土器の精製土器

Ⅲ群 f 類—浅鉢形土器の粗製土器

Ⅲ群 g 類—注口土器

Ⅲ群 h 類—無文土器

Ⅲ群 i 類—土製品

Ⅲ群 a 類土器—〔第17図1、第20図3、第25図4～17、19、20、第26図1～7〕

実測図で示した2点の土器は两者とも、口縁部が欠損しているため、文様構成は明確には言えないがゆるやかな山形状を有する棱線文で、文様帶を区画している。無文帯の文様構成が認められることから判断して、大木10b式併行の土器群といえる。地文の縄文原体は前々段多条の縄3本を使用しているものが多くみられる。文様帶の施文は充填縄文が占める。

Ⅲ群 b 類土器—〔第18図1、第19図5、第20図2、第27図1～21、23、第28図1〕

第18図1は、今回の調査区出土の土器で完全に復元した深鉢形土器である。「c」状文を調整沈線文で、3単位配した文様構成である。第27図1は、楕円文を横位に配した文様構成で、無文の楕円文と充填縄文の楕円文の両者を配す。第27図18は縦位の楕円文を施文している。

区画した内部を、縄文で埋めるものと、無文帯の両者が認められることから、大木10a式併行から大木10b式に移行する土器群と考えられる。なお、第27図18～23は、小形の土器群である。

Ⅲ群 c 類土器〔第26図8～15〕

棱線文や稜線帯で区画した無文帯を、口唇部から口縁部に配する、土器群である。浅鉢形土器群にも同様な形態が認められる。外反する器形が大半である。

Ⅲ群 d 類〔第15図2、第19図2～4、第20図1、第23図1、2、第28図3～17〕

第23図1の土器は今回出土した土器群の中で最も大形であり、口径33.7cm、器高は現長で43.0cmを測る。第19図4、第20図1は口縁部が欠損しており、Ⅲ群 a、b、c 類のいづれかに相当するとも考えられる。第19図2は補修孔が認められる。器形はゆるやかに外反するタイプがほとんどである。縄文原体は前々段多条の縄3本から4本を施文している。複節や直前段の縄は見られなかった。

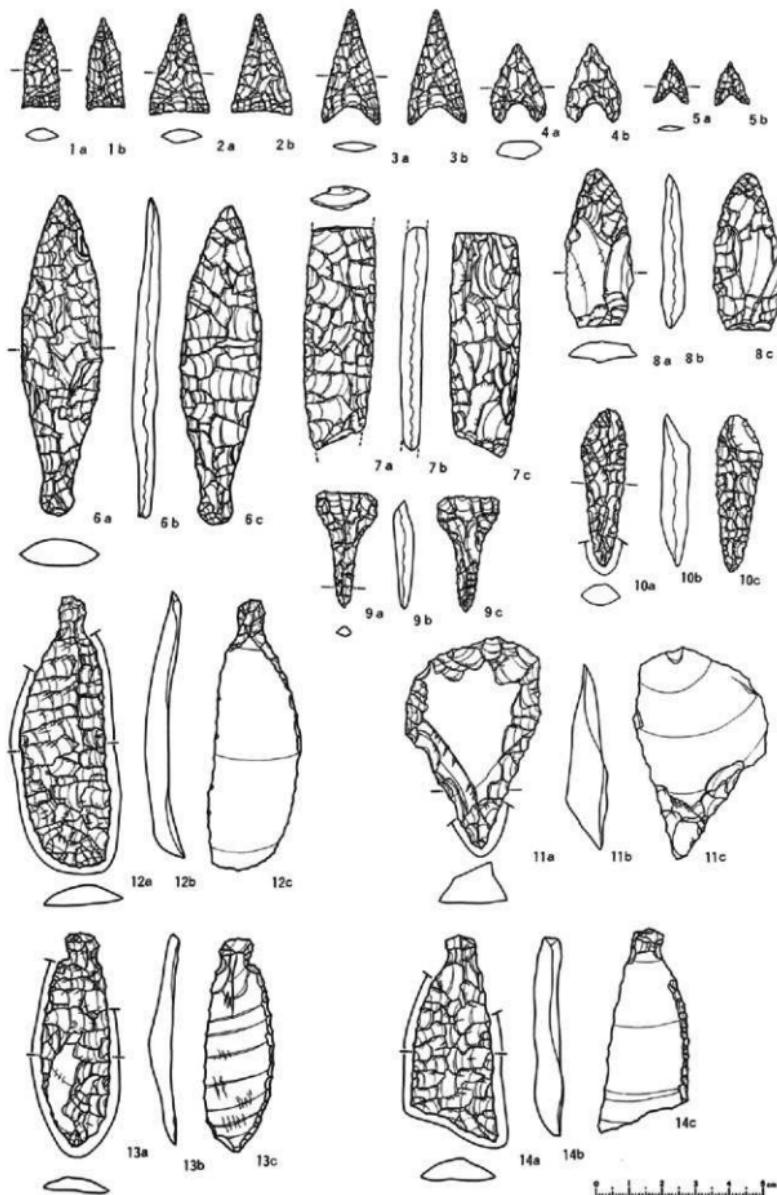
Ⅲ群 e 類〔第21図1、3、第25図18、21～28〕

第21図1は、有孔彩色土器である。文様構成は第22図1で示すように、2区画、4単位の「c」字状文と楕円文からなる。充填縄文で、区画以外は無文で、口唇部から口縁部にかけて赤色に彩色された土器である。口唇部直下に幅3.5cmの間隔で直径2mmの穴を両面から穿孔している。縄文原体は単節。

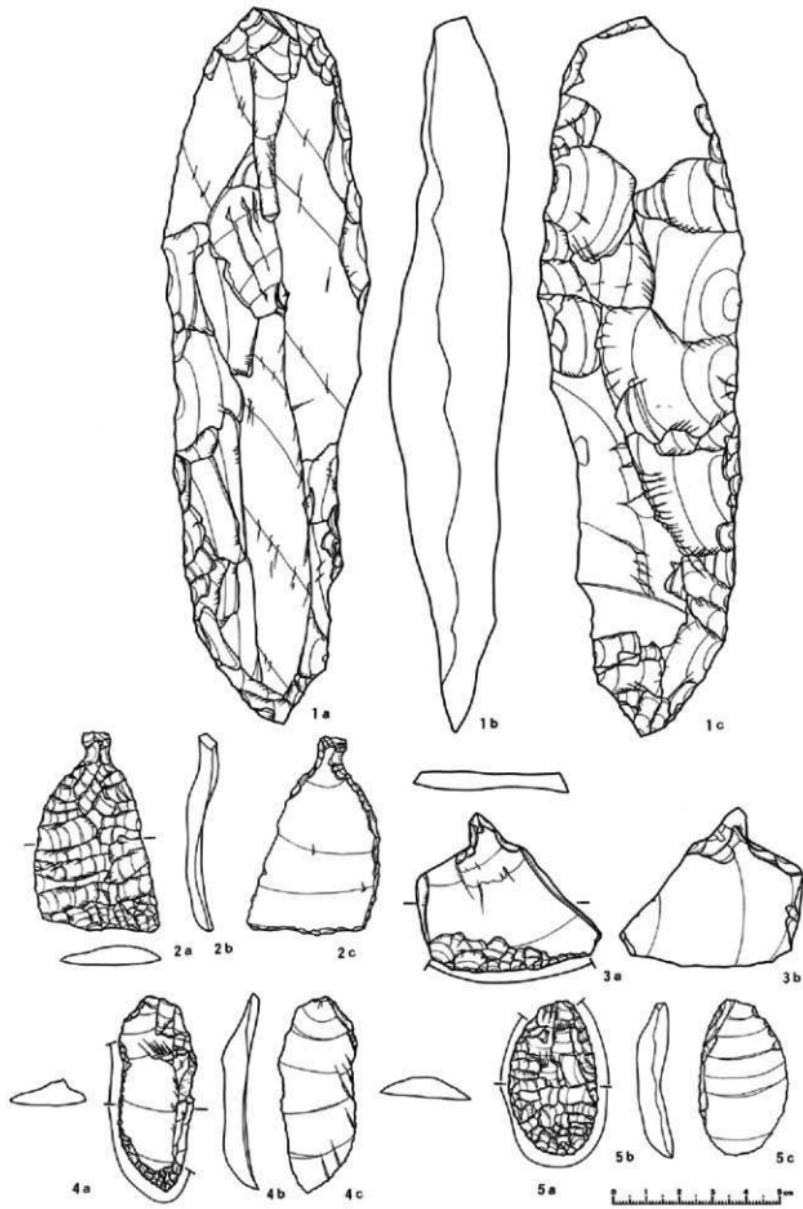
彩色は、土器の内面にも見られる。本跡からには、図示した他にもこの土器以外の破片が1点出土している。第21図3は並内溝巻文を単位文として、3単位配した文様構成である。第22図3。その間を棒状工具による突刺文を配す。口縁部はゆるやかな波状をなす。第24図23～28も口縁部が波状を呈す土器

深鉢形の精製土器

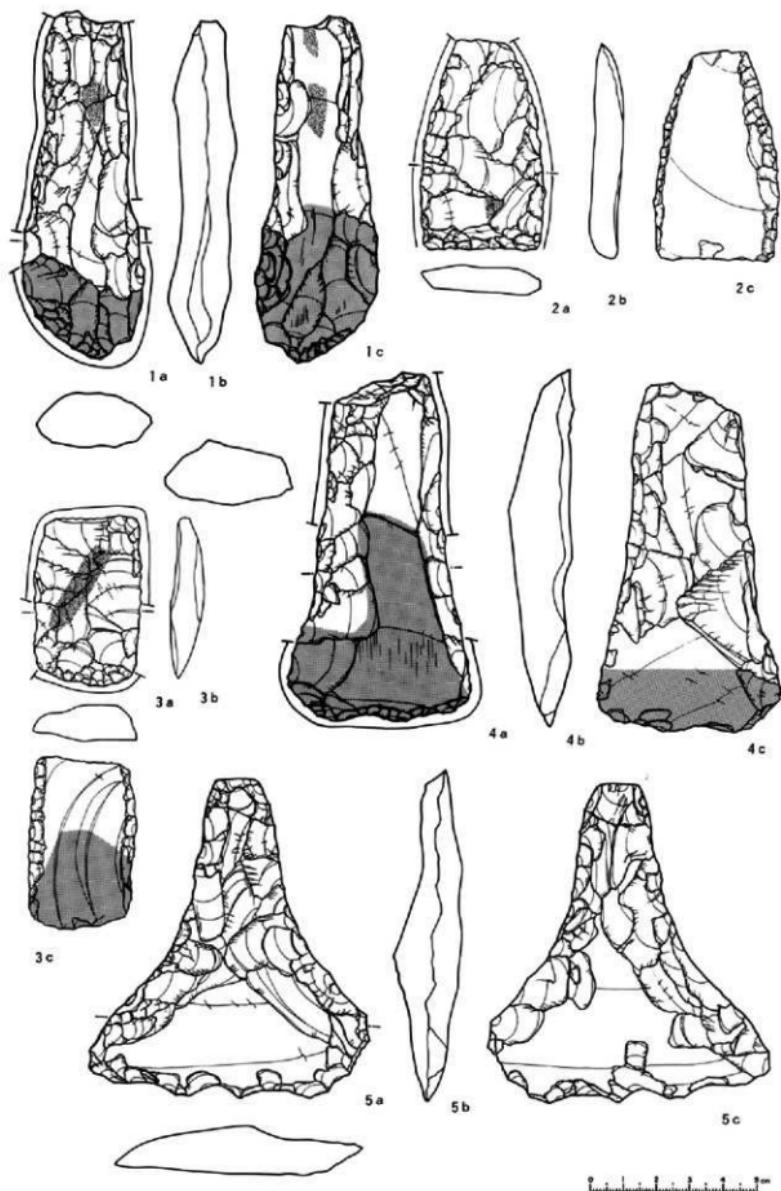
深鉢形の粗製土器



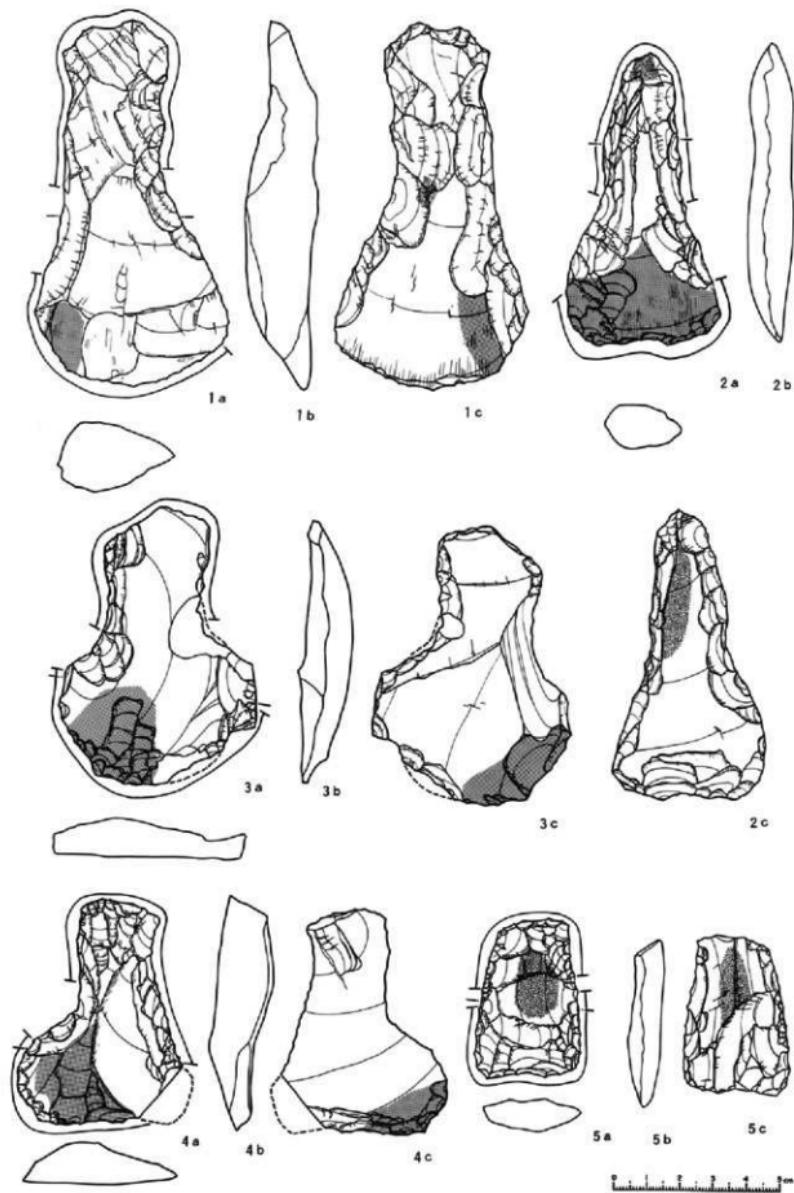
第29図 塔ノ原遺跡出土石器実測図（1）



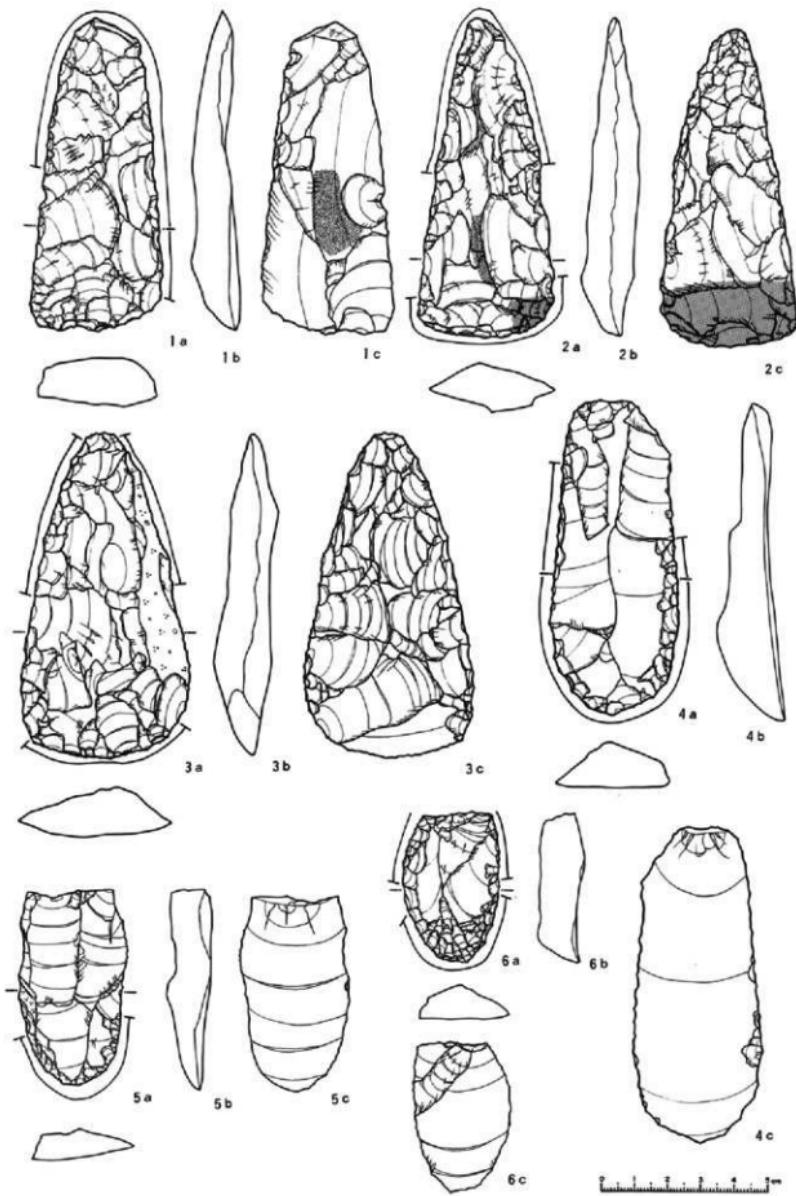
第30図 塔ノ原遺跡出土石器実測図（2）



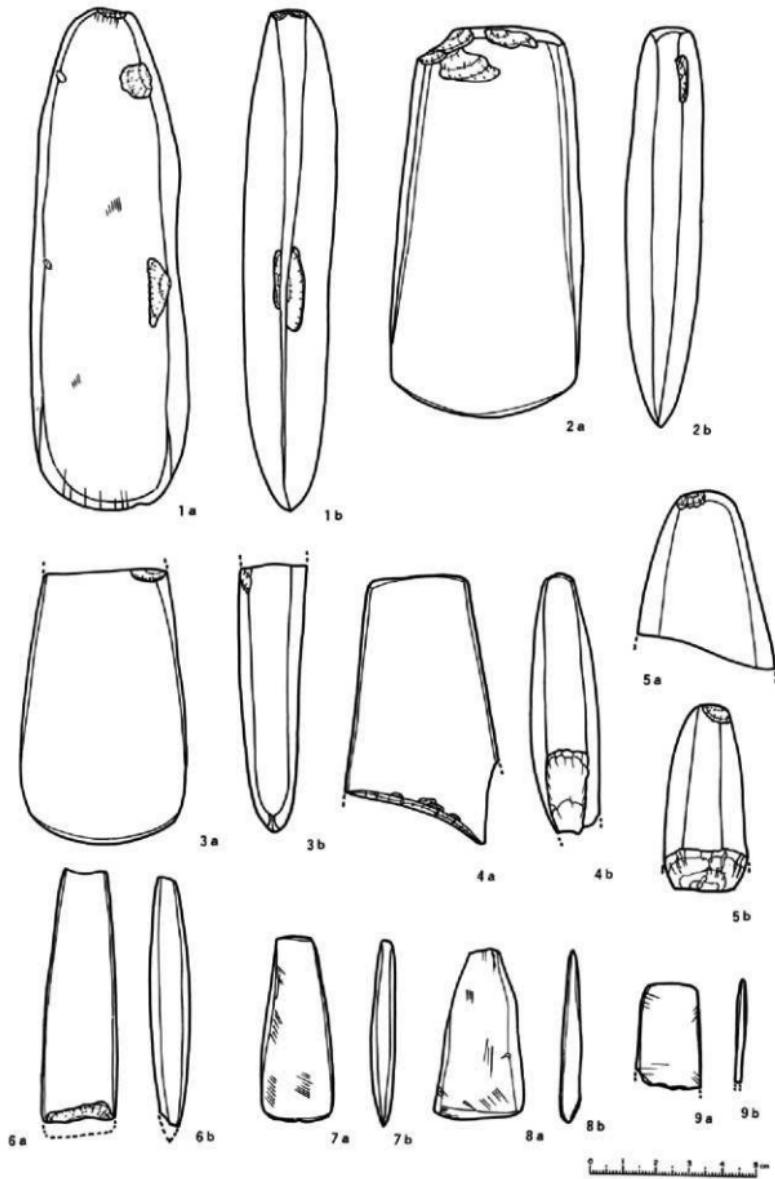
第31図 塔ノ原遺跡出土石器実測図（3）



第32図 塔ノ原遺跡出土石器実測図（4）



第33図 塔ノ原遺跡出土石器実測図（5）



第34図 塔ノ原遺跡出土石器実測図（6）

群である。区画した箇所に縄文を施文する土器群が多いことから、大木10a式併行に近い大木10b式併行の土器群と考えられる。

Ⅲ群f類〔第19図1、第26図16~22、第28図2〕

第19図1は、稜線文を頸部に施した浅鉢形土器である。第25図20は内反する器形で、当市の花沢a遺跡からの出土例がある。大木10a、10b式併行の土器群である。

Ⅲ群g類〔第21図2、第27図26〕

第21図2は、3分の2以上が残存している復元土器である。第22図2で示す文様構成であり、2単位の両内渦巻文で構成される。縄文原体は単節を施文し、両内渦巻文は稜帯で表出している。注口部及び底部に漆のかたまりが付着していた。第27図26は片口土器の注口部破片である。両端部に調整沈線を配し、単節の縄文を施文している。大木10b式併行注口土器である。

Ⅲ群h類〔第26図23~32〕

23は「X」字状に粘土を貼付し、内反する浅鉢形土器と想定される。29は底部に近い破片である。25~28は稜線文が施されている。24は稜帯文が認められる。大木10b式に併行する土器であろう。

Ⅲ群i類〔第24図21~24〕

縁辺を研磨によって整形した、円盤状土製品で4点出土している。胎土から判断して縄文中期の土器を再利用したものであり、大木10a、10b式に併行する土製品と言えよう。

◎石 器

今回の調査区からは、チップ543点、フレーク5,075点、石器236点が出土した。石材はすべて頁岩を使用している。石器は石鎌20点、石鎌の未完成8点、石槍7点、石槍の未完成4点、石匙31点、石匙未完成8点、石窓状石器23点、石窓状石器の未完成3点、石錐9点、スクレーパー類39点、打製石斧30点、打製石斧未完成4点、石剣3点、磨斧13点、欠損面を有す石器29点となる。これらの石器群について下記に述べる。

石鎌〔第29図1~5〕

図示した5形態が出土している。1の形態が最とも多く8点、次いで2の形態6点、3の形態4点、4、5の形態は各1点づつ出土している。基部が平坦な石鎌が多く出土している。

石槍〔第29図6~8〕

6、7、8の3形態がある。6、7は縄文前期に位置づけられる石槍で、特に6は大木5、6式併行の時期に出土する特徴的な石槍である。本遺跡で言えば、Ⅱ群土器群併行の石器である。

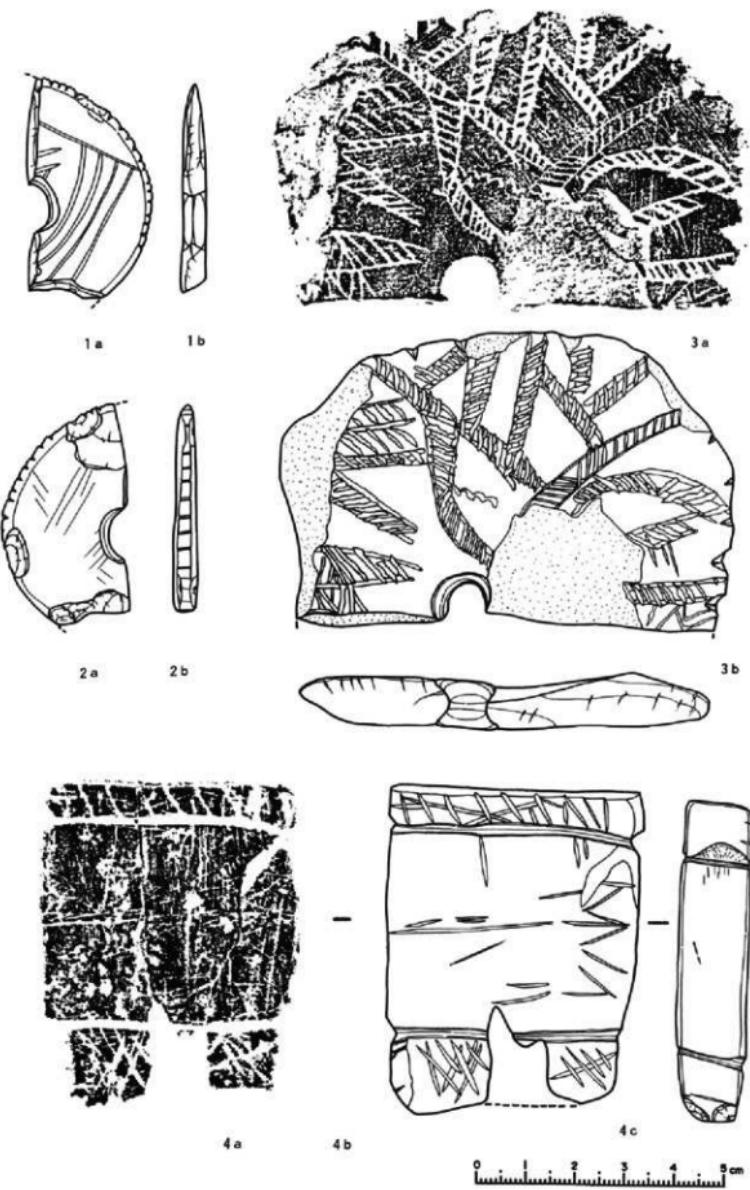
石錐〔第29図9~11〕

つまみ部を有する9が2点、棒状に整形した10が2点、剝片の素材を変えないで調整した11が5点の3形態が出土している。10は実測図に実線で示した縁辺に使用痕が観察された。

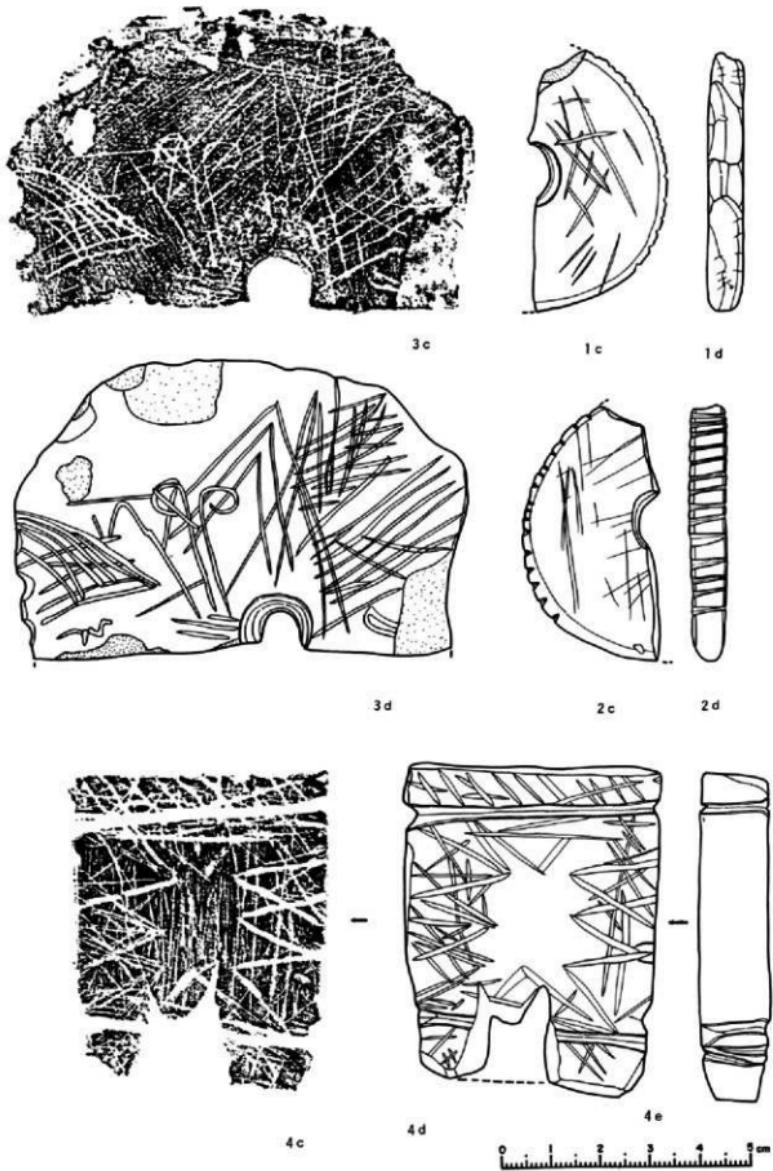
石匙〔第29図12~14、第30図2、3〕

実測図で示す5形態が出土している。13、14の形態が各7点づつで最も多い形態であり、次いで12、2の形態が各4点、横形の3の形態は1点だけであった。13、14の形態がⅠ、Ⅱ群土器に併行する石器群である。

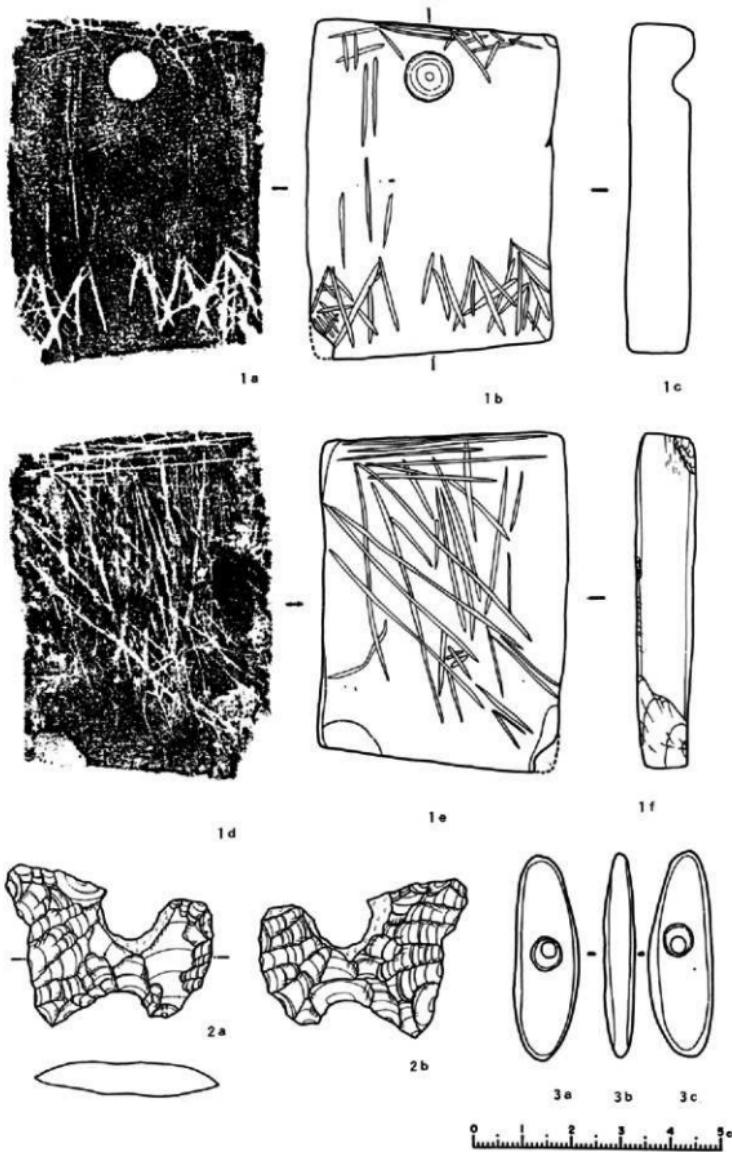
石窓状石器〔第31図2、3、第32図5〕



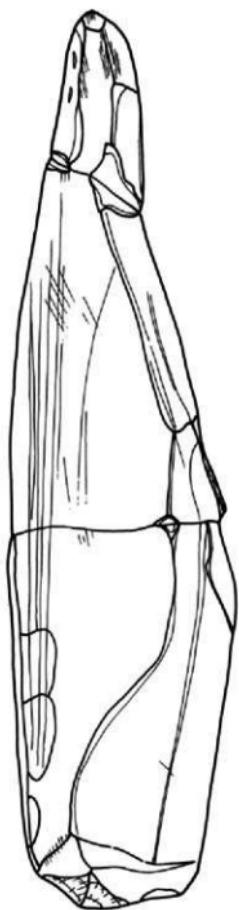
第35図 塔ノ原遺跡出土石器実測図（7）



第36図 塔ノ原遺跡出土石器実測図（8）



第37図 塔ノ原遺跡出土石器実測図（9）



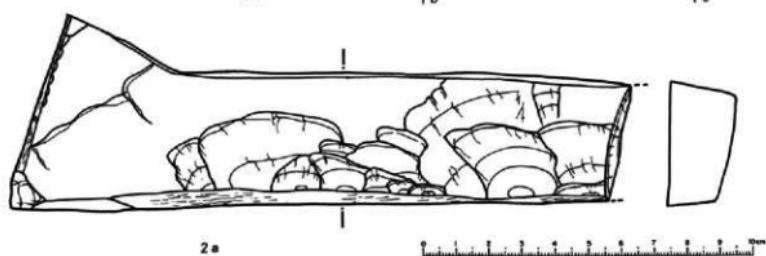
1 a



1 b



1 c



2 a

7 6 5 4 3 2 1 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 mm

第38図 塔ノ原遺跡出土石器実測図 (10)

実測図で示した「◎」を柄づれを、「●」は使用痕をあらわす。

第32図5の形態は5点、第31図3の形態も5点、同図2形態は10点出土している。この形態の石器は当初は打製石斧として製作されたが、刃部再生によって、形態が変容した石器群と推測される。

打製石斧〔第31図1、4、5、第32図1～4、第33図1～3〕

8形態が出土している。第31図1の形態は3点、同図4の形態は1点、同図5の形態は2点、第32図1の形態は4点、同図3の形態は7点、第33図1の形態は2点、同図2の形態は4点、同図3の形態は7点であった。これらの打製石斧の中で擦形を呈す第30図4、5、第32図1～4は縄文中期のⅢ群土器併行、他の形態の打製石斧はI、II群土器併行と考えたい。

スクレーパー類石器〔第30図4、5、第33図4～6〕

エンド、スクレーパー〔搔器〕としては第30図4と第33図6の2形態がある。前者は16点、後者は8点出土している。規格的な形状で整形された石器群である。手前に引いて使用する石器群であり、断面形態が「く」の字状になる特徴を示めている。片面調整で占められる。

サイド・スクレーパー〔削器〕としては、第30図5、第33図4、5の2形態がある。第30図5の形態は5点、第33図5の形態は10点であった。

石剣〔第30図1、第38図1、2〕

第29図1の打製石剣1点、第38図1の磨製石剣1点、同図2の未完成石剣1点の3形態が出土した。この中で第38図1は、D Y10の覆土から出土したもので、意図的にこわされて埋納された出土状況であった。打製石剣の石材は頁岩、他は泥岩を使用している。

磨製石斧〔第34図1～9〕

図で示す形態で3形態に分けられる。1の形態、2、3の形態、6～9の形態である。1は木を掘る加工具、2、3の形態は木を伐採する加工具、6～9は鑿の役目を有す加工工具である。

7～9はやわらかい石材を使用していることから、利器よりも、むしろ石斧形石製品であろう。

◎石製品〔第35図1～4、第36図1～4、第37図1～3、第24図18～20〕

刻線画石製品は第35図3である。形状は約半分失われているが、隅丸方形と推測される。中央部に直径約6mmの穿孔があり、縁辺には鋸齒状の刻みがみられる。文様は第34図3a、3bに示す文様で、II群c類土器に類似する。この文様は明らかに前述した土器の文様をねたものであり、北関東の一部に見られる興津式に類似する。

第36図に示した3c、3dは刻線画である。原始風景図と考えられ、構図から推測すると出土地点周辺の風景を描いたものと考えられる。出土地点はグリット58-62、H Y13の南地点にあたる包含層からの出土であった。

琴状石製品は2点出土している。第35図4と第37図1であり、最初に第37図1を発見、次いで約1mはなれて第35図4を発見した。II群土器併行の竪穴住居跡が集中するグリット54-62包含層からであった。このグリットからは、第35図1、2の石製品も出土した。

これらの5点の石製品は、文様や技法から同一年代、II群土器併行に位置づけられる石製品である。

第37図3は緑青色の硬玉であり、E Y29覆土から出土している。同図2は動物形石製品である。

礫器は凹石196点、磨石123点、面取り石20点、石皿26点、砥石3点が出土している。

5. まとめ

今回の調査は鬼面川上流流域での本格的な発掘調査であり、当地区的縄文文化の発達と成立を考える上で重要な手掛りを得たものと言える。

当地に人々が生活を営んだのは、縄文前期初頭の時期であることが明らかになった。その後、縄文前期末葉、同中期未葉期に集落を構成しており、長期に亘る生活の拠点として利用してきたものと推測される。

今回出土した、遺構と遺物についてまとめてみると、遺構は中央部から北側に集中する傾向がみられた。このことは、集落跡が北東から南東部にかけて広がっていることを示唆するものであり、東側の舌状先端部に近い箇所が中心と考えられる。また、縄文中期の遺構のように縁辺部に住居を配し、中央寄りに土壇を配することは集落跡が、東側に向って馬蹄形状を有していた可能性がある。

この中で特に注目されるのが、複式炉をもつ豊穴住居跡の変遷である。HY 3～HY 5 の3棟はHY 3→HY 4→HY 5 の順で建て替えを行なっており、そのつど複式炉の形態が微妙に変化し、炉跡も次第に大きくなっている。複式炉を有する豊穴住居跡は米沢市内だけでも6遺跡から認められているが、塔ノ原遺跡のように短期間で変容を示す例は少ない。

遺物としては、石器群が注目される。特に刻線で人物を描いた石製品は全国的にみても類例が少なく貴重な資料となる。これらの石製品が出土した層位、すべて縄文時代前期未葉に属するものであり、今後の前期の集落を研究する上で重要である。

石製品に描かれた文様は、興津式と呼ばれる土器文様に類似することから、本遺跡で製作されたものかは、疑問が残る。

使用している素材の礫は当地で産出する泥岩、粘板岩である。また、調査区からは、石製品の製作段階で得られる素材の剥片が多数出土しており、石製品製作を裏づけるものと考えられる。したがって、一連の石製品は本遺跡で製作されたものであろう。

縄文前期の土器群も注目される。縄文前期初頭の表裏燃系文土器は、八幡遺跡群等で破片は出土しているが、今回のように一括して、しかも住居跡に伴なって出土したのは始めてである。今回は土器拓影図で示したが、時間をかけねば、復元も可能である。

縦年にわたり、縄文早期未葉と縄文前期初頭をつなぐ土器群に位置づけたが、今後の資料の蓄積次第では、相異することも予想される。次にⅡ群土器とした、大木5式併行の土器群がある。

この土器群に併行する、興津式土器があり、胎土、文様、器形から判断して、搬入された土器と考えられる。興津式土器は、北関東の一部に見られる土器群であり、その地との交流を裏づける資料と言えよう。

縄文中期の遺物としては、翠が上げられる。HY 4 の複式炉から出土したもので、副葬品と想定される。翠は当市では産出しない岩石である。新潟県の糸井川流域が翠の産地として、有名であり、色調から見ても、前述した場所に限定される。

縄文中期の土器では、注口土器、有孔彩色土器がある。破片が多く出土した割には、復元出来た土器類が少なかった。縄文中期の土器群は大木10b式併行が中心であった。

石器類では、打製石斧の形態が注目されよう。7形態に細別され、縄文前期の打製石斧は茎部が尖状をなす形態、縄文中期は撥形を有形態と明確に形態が細別できることである。

大木5式併行にともなう特徴的な石器としては、石槍に分類した第29図6があげられよう。押出形ポイントと呼ぶ石器群である。押出以前から出土していたことは周知の通りであり、名称としては問題がある。

今回の塔ノ原遺跡の発掘調査は、遺跡面積の約3分の1の調査範囲であり、遺跡全体を把握することは困難である。だが、高度な技術で製作した特異な石製品の出土をみても通常の集落ではない。遺跡の範囲も万世の八幡原遺跡群や南原の大槻遺跡、窪遺跡、花沢の台坂遺跡に匹敵する。この自然要害ともいえる大樽川と網木川の両河川に狭まれた好立地条件を、選出して集落を構成した「塔ノ原遺跡」も、八幡原遺跡群等と同様に、当地区一帯の遺跡で中核をなしていた遺跡であろう。

最後に今回の調査に際し、協力いただきました、関係各位、地元のみなさん、作業員のみなさんに心から御礼申し上げます。

参考文献

- | | | |
|------------|---|----------|
| 1975 手塚 孝他 | 米沢市八幡原中核工業団地造成予定地内
埋蔵文化財調査報告書 第1集 | 米沢市教育委員会 |
| 1979 佐藤庄一他 | 山形西高敷地内遺跡 発掘調査報告書
山形県埋蔵文化財調査報告書 第17集 | 山形県教育委員会 |
| 1982 小林達雄他 | 縄文土器大成（縄文早期、前期） | 講談社 |
| 1986 手塚 孝他 | 上浅川、第3次発掘調査報告書
米沢市埋蔵文化財調査報告書 第15集 | 米沢市教育委員会 |
| 1988 手塚 孝他 | 遺跡詳細分布調査報告書 第1集
米沢市埋蔵文化財調査報告書 第23集 | 米沢市教育委員会 |
| 1991 菊地政信 | 一ノ坂遺跡発掘調査概報 第1集 | 米沢市教育委員会 |

写 真 図 版



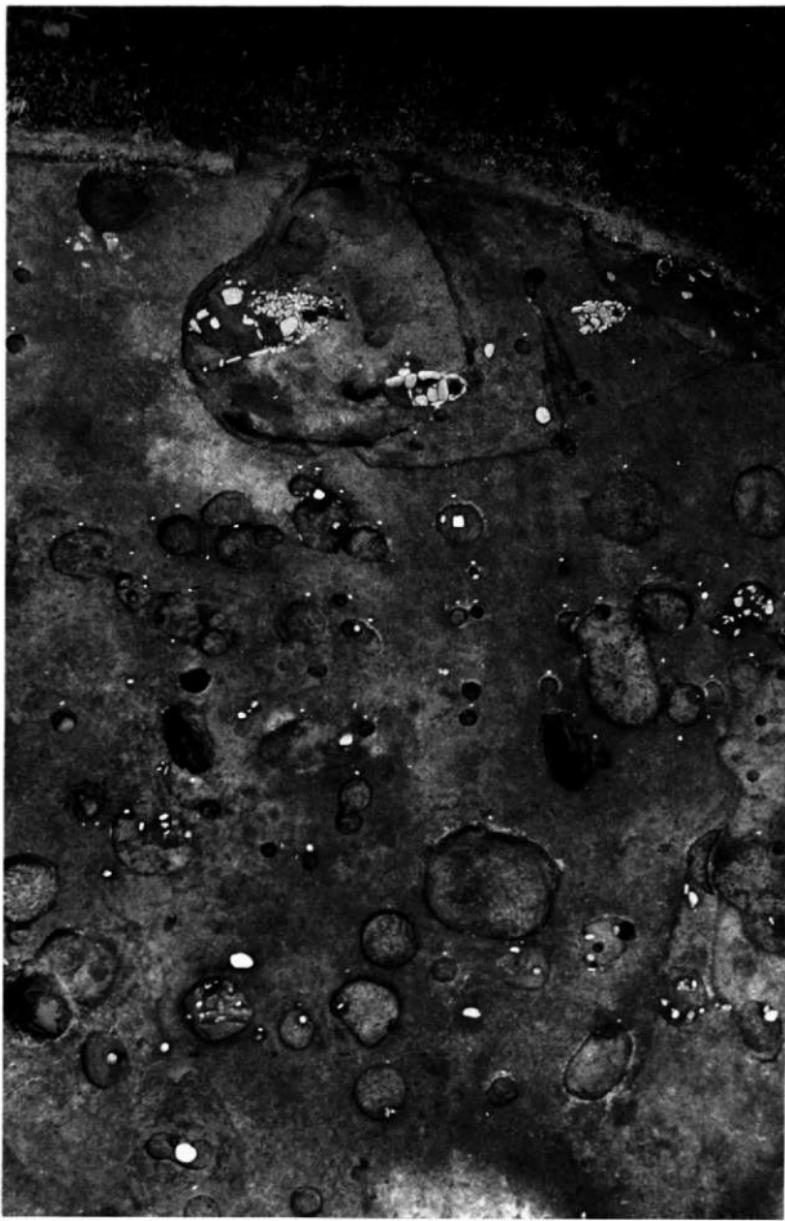
▲ 発掘前の風景（東方から）



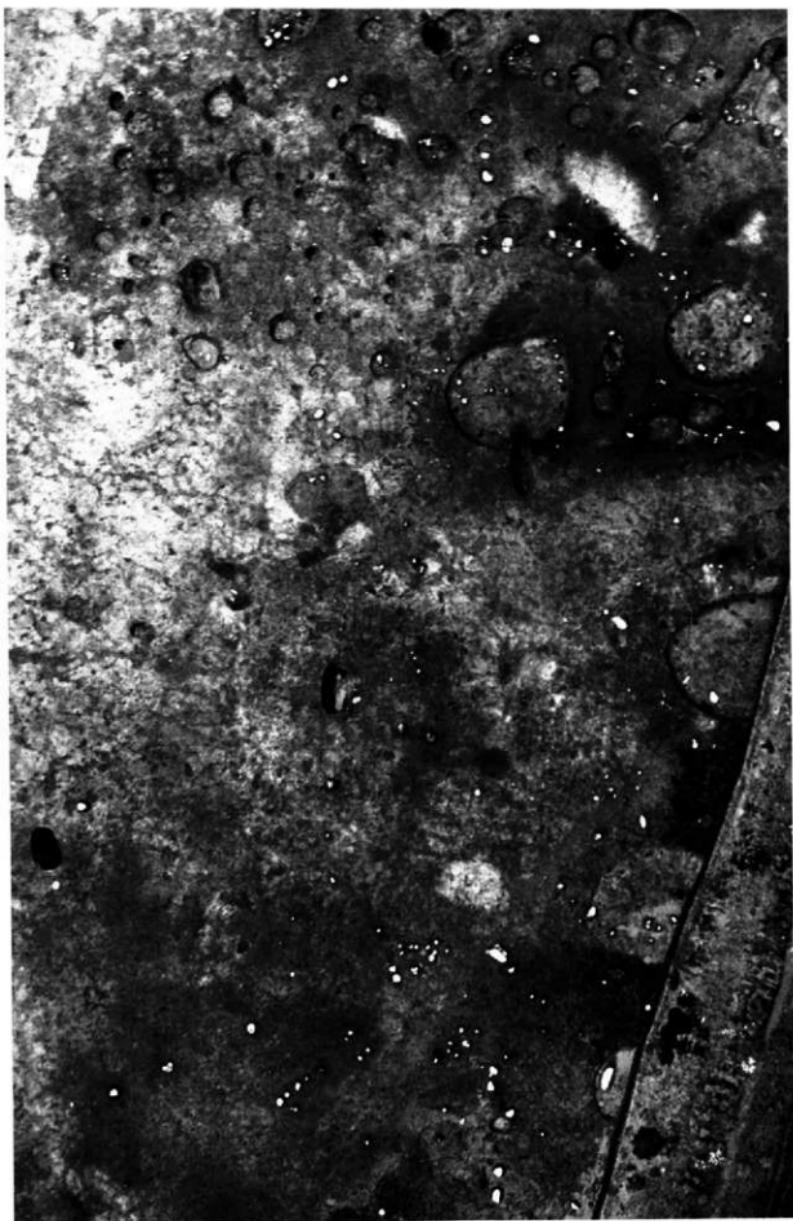
▲ DY10遺物出土状況（南方から）



▲ 発掘調査参加者（東方から）



▲ 北東部遺構全景（空中から）



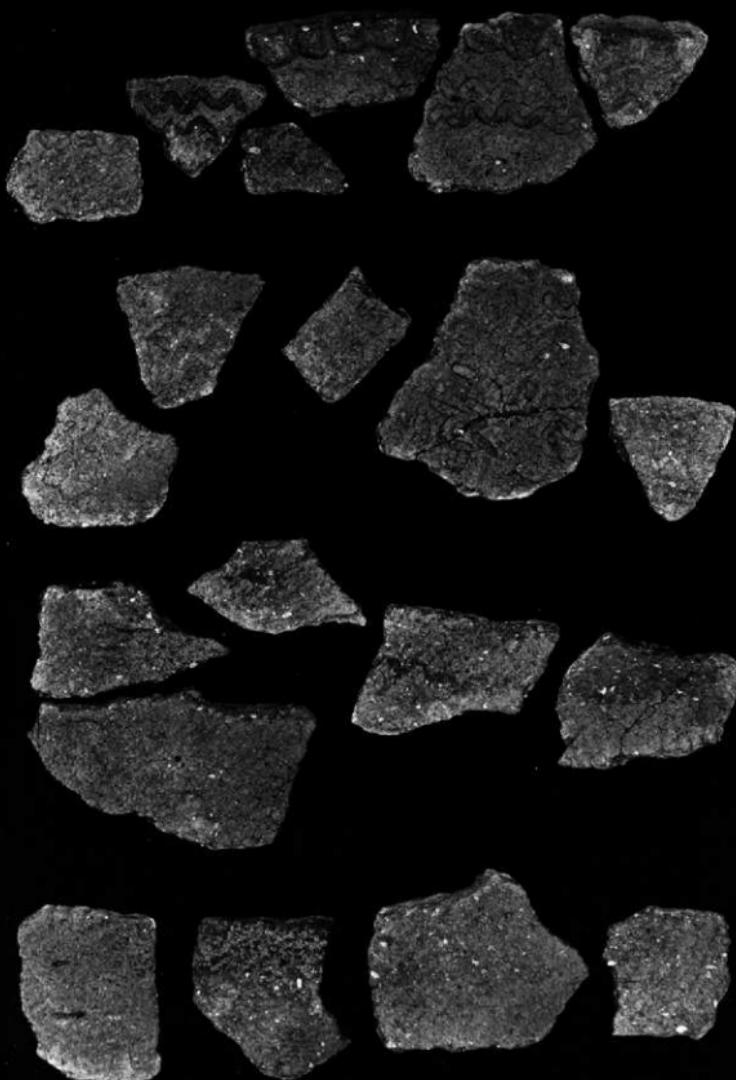
▲ 北西部遺構全景（空中から）

第四図
塔ノ原遺跡出土の土器



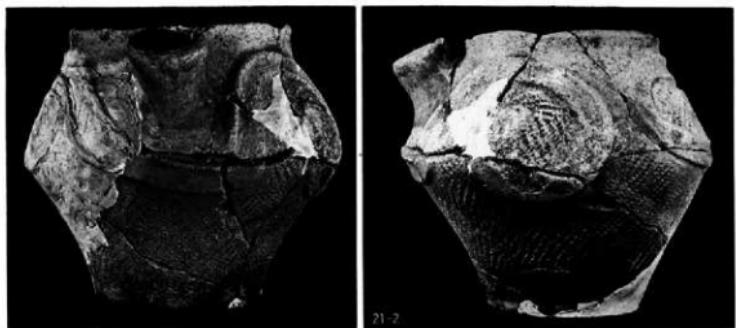
※ 例16-1 → 第16図1を示す

第五図 塔ノ原遺跡出土の土器(2)

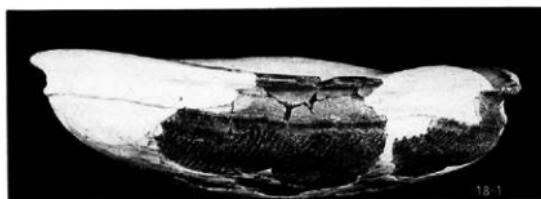


16-2

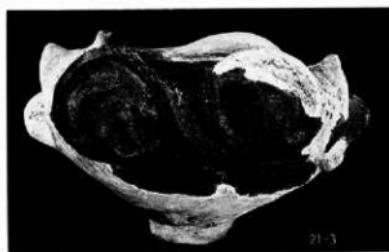




21-2



18-1



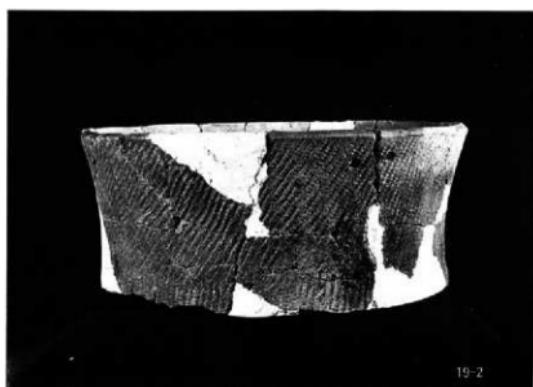
21-3



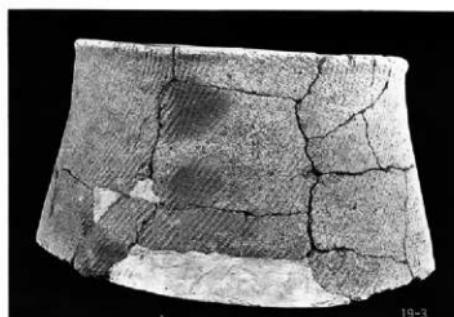
17-2



19-4



19-2



19-3



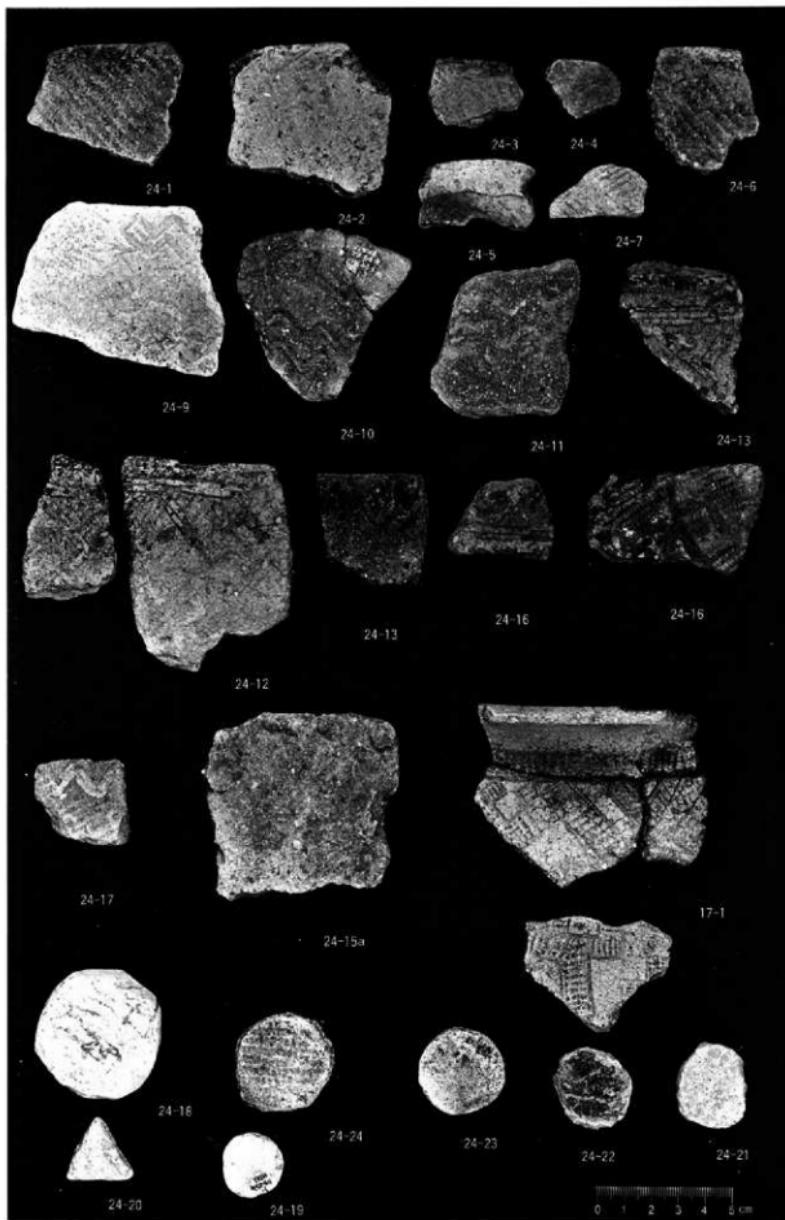
19-5



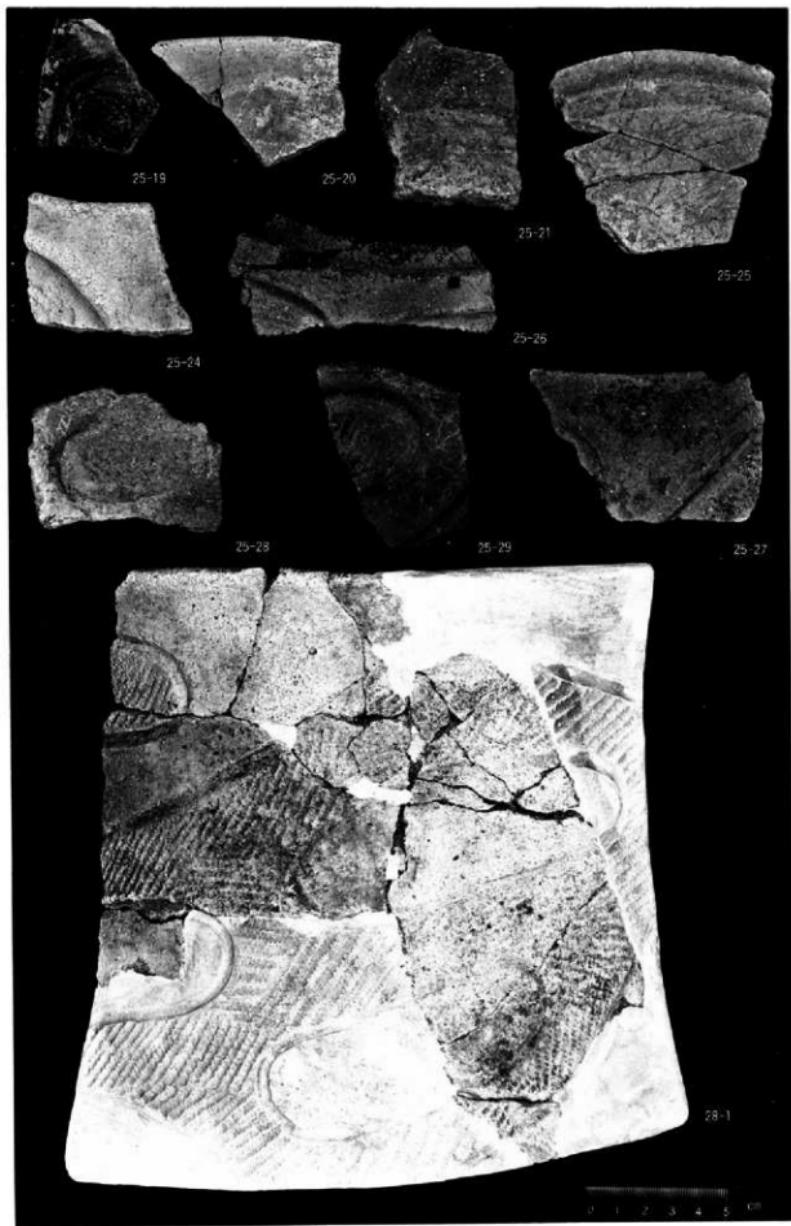
23-1

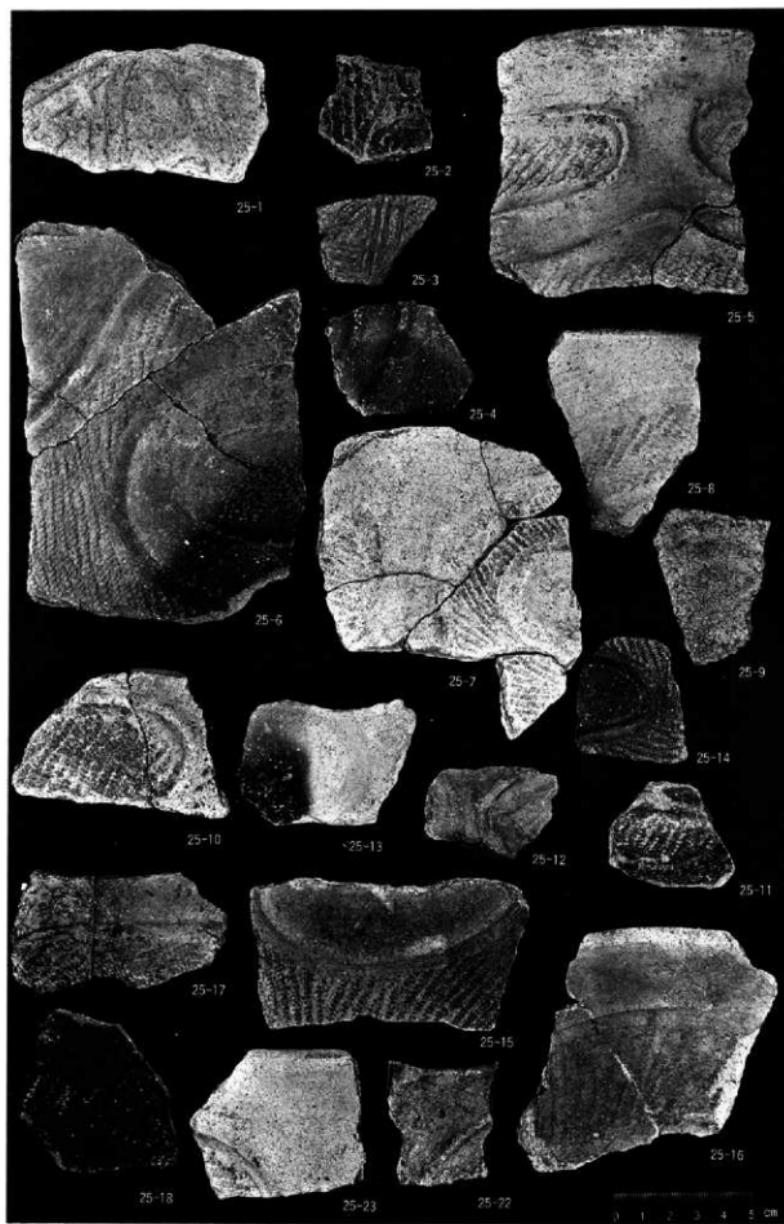


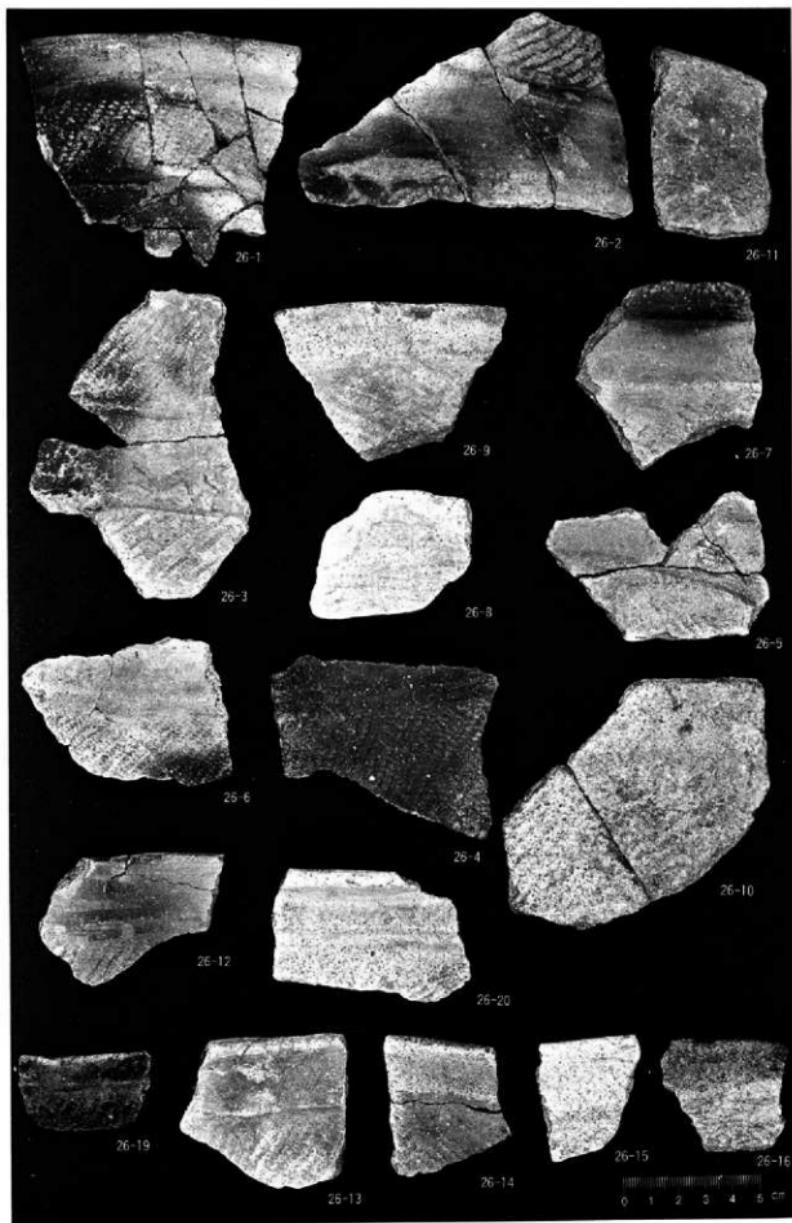
23-2

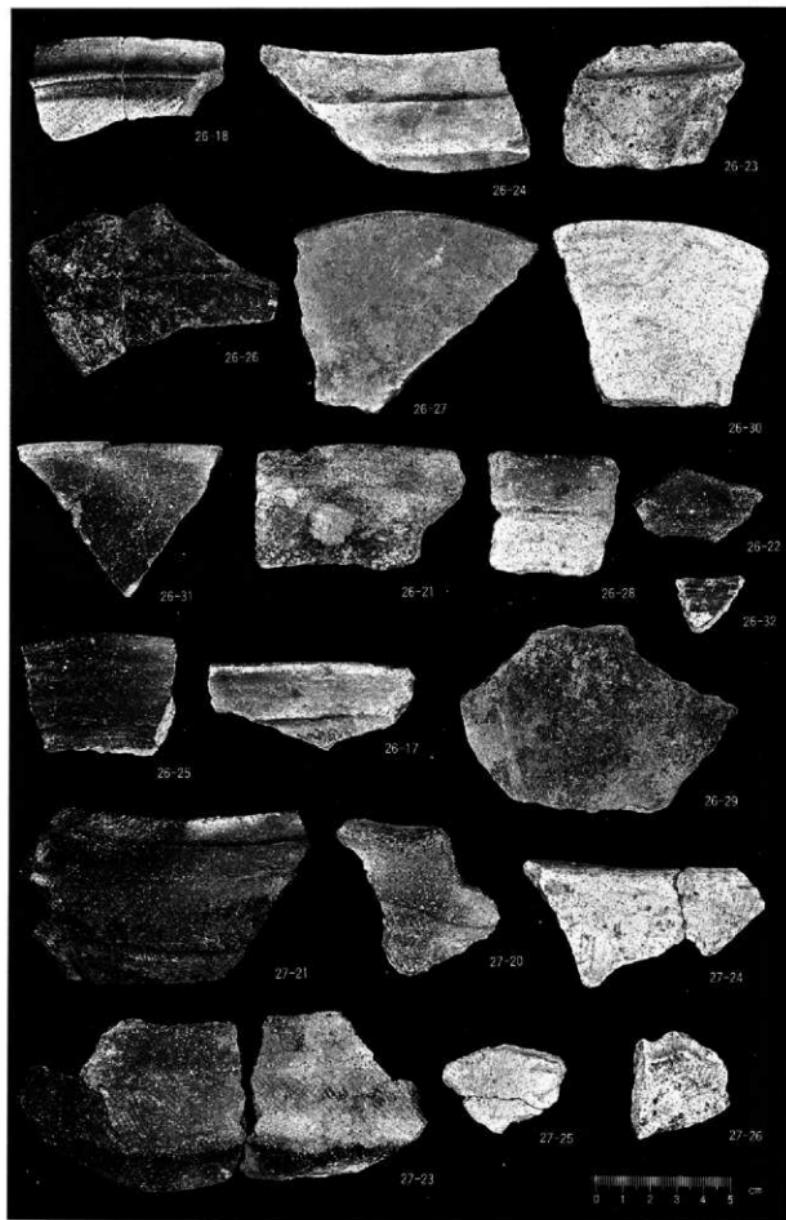


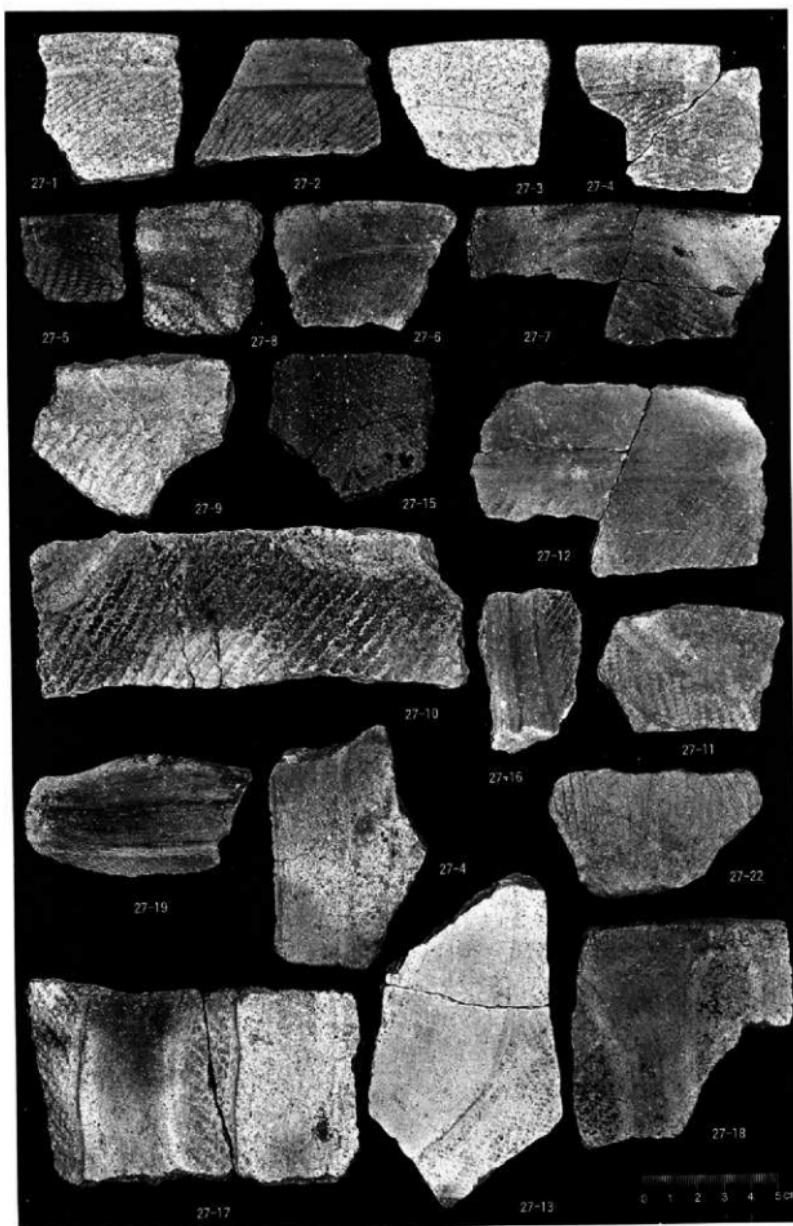
第十一図版 塔ノ原遺跡出土の土器（8）

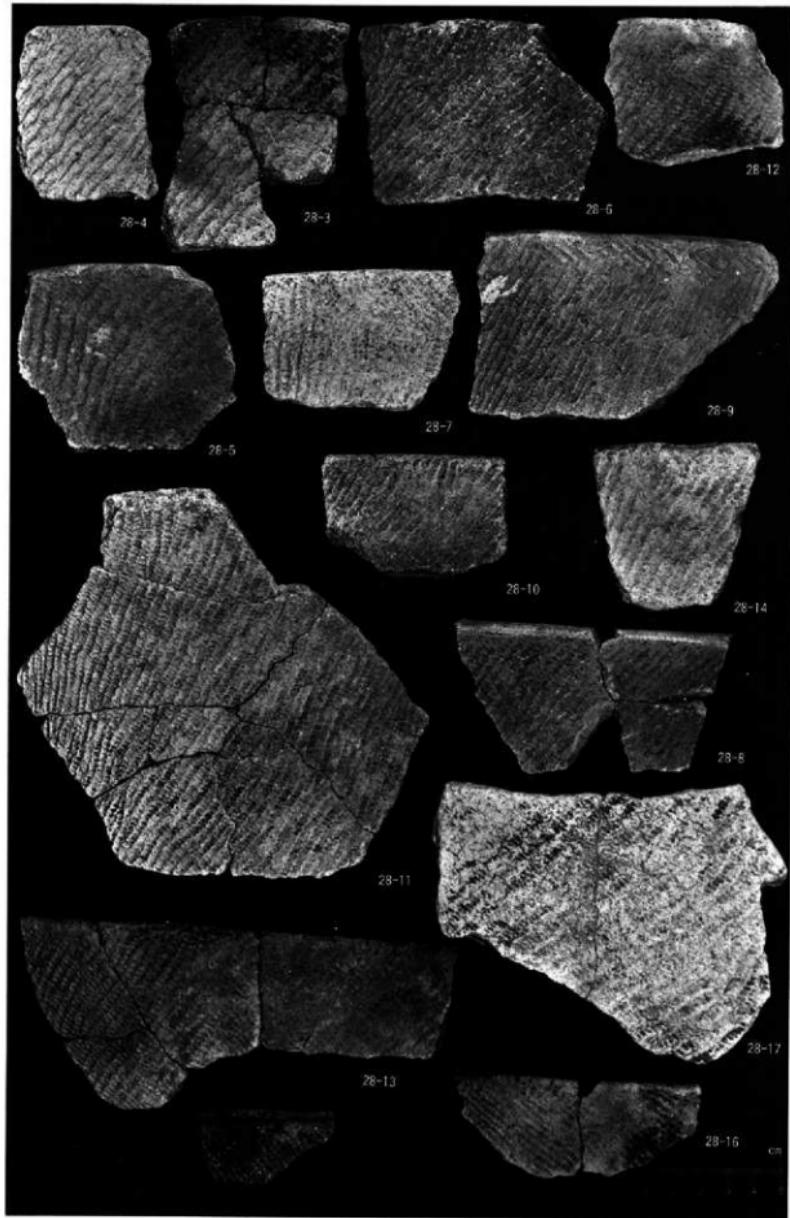


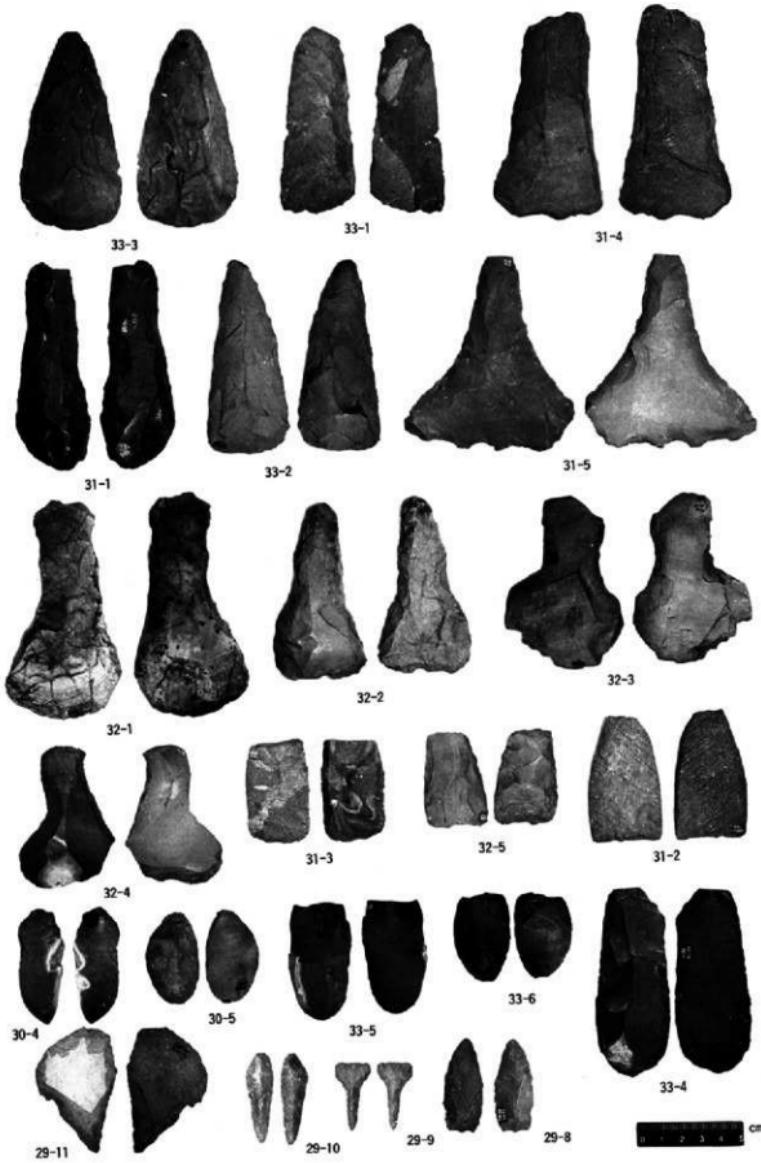




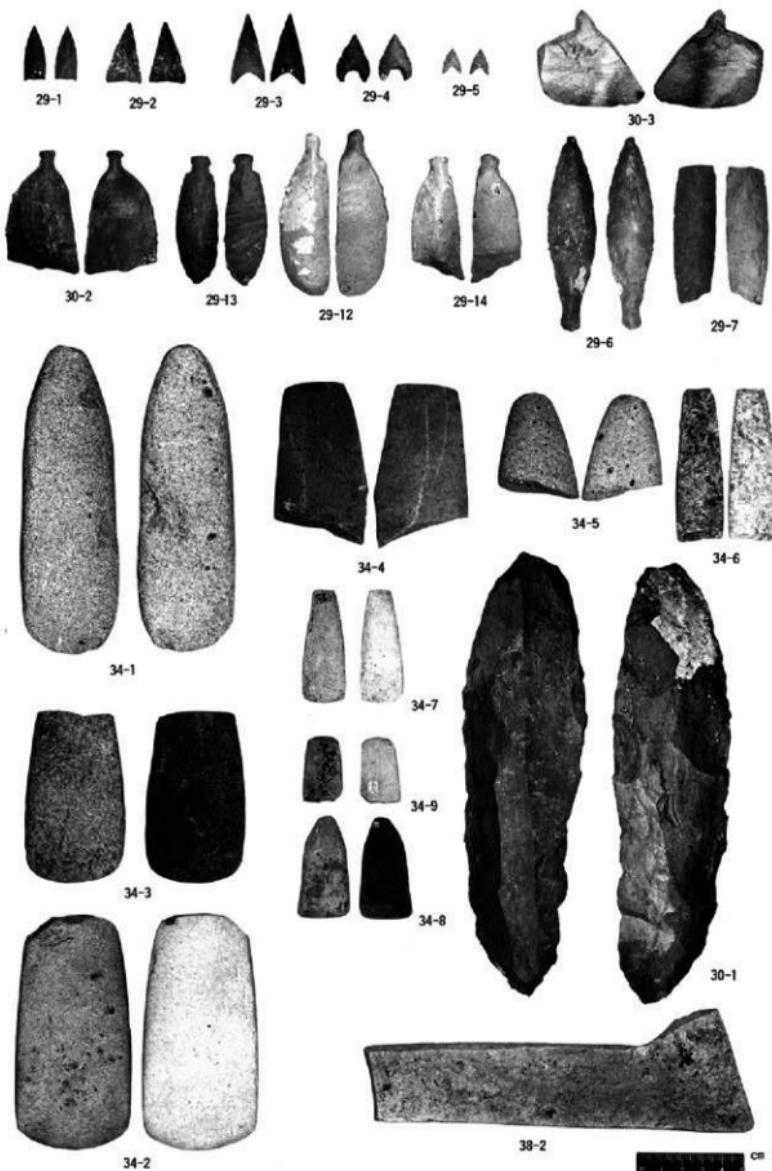






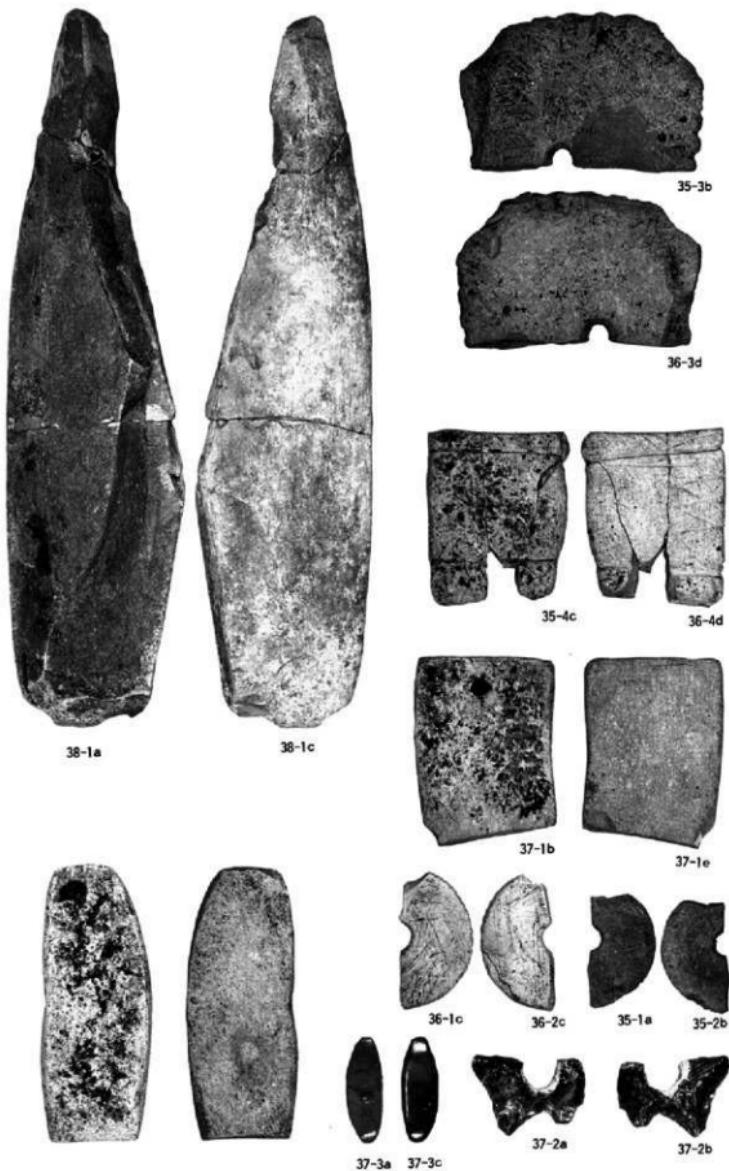


第十八図版
塔ノ原遺跡出土の石器
(2)



CM

第十九図版 塔ノ原遺跡出土の石製品（一）



実測図なし



米沢市埋蔵文化財報告書 第43集

塔ノ原

発掘調査報告書

平成6年3月25日 印刷

平成6年3月31日 発行

発行 米沢市教育委員会
米沢市金池三丁目1-55

TEL (0238)22-5111 内線7504

印刷 (株) 山口印刷
米沢市中央3丁目3-20
TEL (0238)23-1761